花ノ宮町限定☆美少女ヒーロー

光太朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
花ノ宮町限定☆美少女ヒーロー

【Ｎコード】
Ｎ９９０８Ｘ

【作者名】
光太朗

【あらすじ】
遠い昔、なりたいものにならせてあげると、仮面の男がいった。ヒーローになりたいと、少女は願った。そして十二年ぶりに、懐かしの町に帰ってきた少女は……！？　勢い重視のファンタジッククライトコメディ☆

ｓｃｅｎｅ＿０　「魔法が使えるんだ」

燕尾服に黒い仮面。
見るからに怪しい男が、公園で一人遊ぶ少女に近づいていく。
「やあ、お嬢ちゃん。かわいいね」
少女は砂場に座り込んで、ファミリーレストランごっこをしている最中だった。お待たせしました、ハンバーグでございます。砂の塊を並べていく。
「お名前は、なんていうのかな」
少女は顔を上げた。男を一瞥し、はきはきと答える。
「あのね、おじちゃん。ひとに名前を聞くときは、まず自分が名乗らないといけないんだよ」
目線を戻し、ハンバーグ作りを再開する。男は一瞬沈黙し、咳払いをした。
遠くを見て、目を細める。
「名、か……。そうだね。ではお兄さんのことは、美しき闇商人、Ｊ・Ｊと呼んでもらおうか」
さりげなく、お兄さんを強調した。少女は首をかしげる。
「うつくしきやみしょうにん、じぇいじぇい？」
大きな目を、何度もまたたかせた。
「うつくしいの？」
「……見てわかるだろう、お嬢ちゃん」
Ｊ・Ｊと名乗った仮面の男は、怒りを堪えるように、それでも甘い声を取り繕って、いう。
「とっても、美しいじゃないか」
「そうかなあ。そんなことないと思うけどなあ」
少女は全力で正直だった。Ｊ・Ｊは少女に背を向けて、こめかみを押さえる。十数秒で復活すると、少女に向き直り、渾身の笑みを披露した。

「それで、お嬢ちゃん。お名前は？」
「あたしは、野中ナノカ。南花幼稚園真ん中組の五歳だよ。好きな食べ物はこしあんのおまんじゅうとレーズンバターサンドで、嫌いな食べ物は……」
「いや、いいよ、わかった」
少女、野中ナノカは唇をとがらせた。まだまだこれからだったのに。
Ｊ・Ｊは砂場の脇に膝をつき、ナノカの頭をそっと撫でる。
「お兄さんはね、魔法が使えるんだ。ナノカちゃん、君にはなりたいものがあるだろう。お兄さんの特別な魔法で、ナノカちゃんのなりたいものに、ならせてあげるよ」
「なりたいもの……！」
ナノカは、目を輝かせた。
なりたいものは、たくさんある。ファミリーレストランの綺麗な店員、優しい幼稚園の先生、おしゃれなママにだってなりたい。
しかしナノカは、なれるものとなれないものがあることを、知っていた。世の中にはフィクションがあるということを、理解している五歳児だった。
だからこそ、迷わなかった。
毎週日曜日の朝、兄と楽しみに見ているテレビアニメ。それに、兄がやっているゲームや、借りてくるＤＶＤの世界。
本当の意味でなりたいものは、一つだけだ。
「あたし、この町の平和を守る、ヒーローになりたい！」
「いいだろう」
Ｊ・Ｊの黒い目が、仮面越しに光った。白いグローブをつけた手を、そっと差し伸べる。
「その代わり、心をひとつ、いただくよ」
その手が、ナノカの胸元をつかんだ。そこから薄暗い煙のようなものが生まれ、ナノカの小さな身体を浸食していく。じわりじわりと、まるで心臓そのものをえぐり出そうとするように。

やがて、ナノカの胸から、小さな光が飛び出した。それは輝きながら浮遊し、自らＪ・Ｊの口の中に飛び込んでいく。
ごくりと音をたてて、Ｊ・Ｊは光を呑み込んだ。
「ああ、美味だ」
目を細め、満足そうに唇の両端を上げる。
ナノカは悲鳴をあげそうになったが、痛みはなかった。おそるおそる胸を押さえ、シャツをまくりあげて直に確認する。傷があるわけでもない。
「いまの、なに？　なにをしたの？」
顔を上げ、ナノカは動きを止めた。
砂場の向こう、象の形の滑り台。シーソーと鉄棒。そこから先はもう道路で、住宅街が続く。
振り返ると、ベンチ。それだけだ。
たったいままでいたはずの男が、姿を消していた。
「……あれ？」
そんなはずはなかった。それとも、幻を見ていたのだろうか。遊んでいたつもりが、いつのまにか眠ってしまって、夢を見ていたのだろうか。
ナノカの名を呼んで、道の向こうから、兄が駆けてくる。手に提げているビニル袋には、兄とナノカ、二人分のあんまんが入っているはずだった。
ひとりで待っていたのはほんの少し、五分にも満たない間だ。
「――とても良い取り引きだったよ、野中ナノカ」
声だけが降りてきて、しかしそれもすぐに、風にかき消された。

scene_1 「嬉しいんだよ」

「ただいま、花ノ宮町――！」
窓を開け放ち、野中ナノカは叫んだ。
思い切り息を吸い込んで、もったいなくてぜんぶを飲み込む。嬉しさに足をばたつかせ、顔を左右に思い切り振った。ツインテールがぐるんぐるん揺れる。
「幸せ――！」
とりあえず、思いの丈を叫ぶ。せー、せー、せー……住宅街に、声がこだましたような気がした。
「こら、ナノカ。ご近所迷惑だぞ。『ただいま』と『幸せ』は一日一回までだっていっただろう。昨日から何回いってると思ってるんだ」
フリルエプロン姿の野中ヒロシが、おたまを片手に小言をいう。ナノカはえへへと笑った。上目づかいに、親愛なる兄を見る。
「だって、嬉しいんだよ。今日から学校だよ？　あたし、興奮しすぎて噴火しちゃうかも」
媚びているわけではなく、身長差からそういった目線になっただけだ。しかしヒロシは、額を押さえて頬を染めた。
「やばいな……！　なんだそのかわいさは！　ナノカは本当にかわいいな！　ようしいいぞ、噴火でもなんでもすればいいとお兄ちゃんは思うぞ！」
ヒロシの正体は兄バカだ。特大の兄バカだ。
「お兄ちゃんのそういうバカっぽいところ、大好き！」
心の底からナノカがいう。これはこれで、妹バカだ。
二人は右手をあげて、歩み寄った。ガシッと腕を組み、見つめ合って、うなずき合う。一呼吸分間を空けて、同時に天井を見上げた。
「愛！」
「こそ！」

「「正義！」」
声をそろえた。要するに、兄妹でバカなのだ。
「いつまでもこうしていたいが、ナノカ、そろそろ準備を始めてもいいころだな。トイレは行ったか？　ハンカチ持ったか？　まあ、まだ出るには少しだけ早いが……――あ、待って待って、そのかわいい制服姿、写真に撮るから」
「もう、お兄ちゃん。あたし、余裕持って早く行きたいよ。なんでギリギリまで待つの？」
一眼レフカメラで妹の写真をとりまくる兄にかまわず、カバンを肩にかけながら、ナノカが問う。
「いやあ、花ノ宮高校の制服はいいなあ。スカートもほどよく短く、それでいてお嬢様っぽさを損なわない……！　帰ってこれてよかったなあ、ナノカ」
しかし、どうでもいい返答がよこされた。ナノカは頬を膨らませる。
「お兄ちゃん！」
「おお、いいぞ、いいぞ！　その顔はポイント高いぞ！」
「変態」
覚めた声で、ナノカは告げた。
それはまるで、海岸ぎりぎりまで押し寄せようとしてきた波が、さーっと一秒で沖まで引いて、ドロンと消えていくかのようだった。
ヒロシは動きを止め、黙る。
静かにカメラのレンズにカバーをはめ込んで、棚に置いた。
「悪かった」
頭を下げた。ナノカはうなずく。
「ねえ、もう行っていいでしょ？　朝ご飯だって、まだ食べちゃダメっていうし。これじゃ、食べる時間なんてないじゃん。転校初日におなか鳴っちゃったら、恥ずかしいよ」
「わかってないなあ。いいか、もう少しだ。ギリギリまで、待て」
ヒロシはニヤリと笑った。

「ギリギリアウトのタイミングで、食パンをくわえて走り出せ！
忘れるな、合い言葉は、『遅刻、遅刻ぅ』だからな！」
「ギリギリアウトなの？　やだよ、そんなの！」
ナノカは腕時計を見た。すでにギリギリだ。セーフなのかアウトなのか、慣れないナノカには判断すらつかない。
「お兄ちゃんの、バカ！」
「あ、待てナノカ、朝メシ！」
「もー！」
ナノカはテーブルの上に用意されていた食パンをひっつかむ。これでは兄の思いどおりだと知りながらも、口にくわえた。革靴にニーハイソックスの足を入れて、ドアを開けて走り出す。
「行ってきます――！」
アパートの階段を駆け下りると、全速力で高校へ向かった。
五歳まで住んでいた、懐かしの町。以前から憧れだった、花ノ宮高校。
やっと、そこの生徒になれる日が、やってきたのだ。
「遅刻、遅刻――！」
意図せず、叫んでしまう。叫んでからしまったと思ったが、遅かった。走りながら振り返ると、ドアの前で、ヒロシがしっかりとこちらを見ていた。親指を空に向けている。その口が動いた。もはや聞こえないが、「グッジョブ」といっているのは明白だ。
「まったくもう！」
しかし、文句をいっている場合でもない。ナノカは腕時計を確認した。八時十八分。普通に歩いて、高校までは二十分ほどかかる。走ればその半分で着くのだろうか。走って行ったことはないので、わからない。
花ノ宮高校を訪れたのは、三回だけだ。転入手続きを目的としていたため、うち二回は母の運転する車だった。以前はこの町に住んでいたとはいっても、十二年も前のことではあてにならない。見慣れた景色があるような気もするが、気のせいだといってしまえばそ

れまでという程度だ。
近道など、知るよしもなかった。ほかに方法はないものかと思いつつ、馬鹿正直に信号が青に変わるのを待ち、懸命に走る。
「あと少し！」
ナノカは、全速力で走り続ける。
最後の角を曲がり、正門前にたどり着き――
――足を止めた。
がくりと、膝をつく。
アウトだった。
自分の背よりも高い門は、しっかりと閉ざされていた。
「ああ……」
なんということだ。転校初日に、遅刻してしまった。
兄を恨むしかない。
「どうしよう……」
門を飛び越える。
塀をよじ登る。
どちらも不可能ではなさそうだが、そんなことをして良いものだろうか。
絶望的な気持ちで、顔を上げる。いかにも片田舎らしい広い敷地に、どんと構える花ノ宮高校。門の向こうには、ドラマなどでよく見るような長い長い桜並木が続いている。さらに遠くに、古い校舎が二つ。レトロな時計台が、こちらを見下ろしている。
「あれ？」
ナノカは、まばたきをした。まだ、八時二十分を少しまわったところだ。腕時計で確認するが、示している時刻は同じ。
おかしい。家を出るときに、見間違えたのだろうか。まさか、五分かそこらでここまでたどり着けるわけもない。
それに、門が閉まっているのもわからない。八時三十分までに着けば、セーフのはずだった。
「おやすみ……？」

そんなはずはないと思いつつ、つぶやく。
「そんなはずがないでしょう」
しかし、第三者によってしっかりとつっこまれた。
不機嫌そのものの、男の声。
「もう五月だというのに、まだこんな時刻に来る生徒がいたとは。八時二十分までに登校し、すみやかに一限の準備をすること。生徒会の定めた鉄の掟を、知らないとはいわせませんよ」
男は、メガネを人差し指で押さえるようにして、高圧的にいった。門の向こう側から、冷ややかにナノカを見下ろしてくる。
花ノ宮高校の制服を着ている。教師というわけではないようだが、教師よりも偉そうだ。
「知らないよ」
ナノカは、正直にいった。事前説明の際にも、そのようなことをいわれた覚えはない。
「ねえ、入れてよ。これって、まだ遅刻ってわけじゃないんでしょ？」
「遅刻です」
きっぱりと断言される。必死に走って、しかも時計を見る限りでは間に合っている分だけ、納得がいかない。ナノカは両の拳を握りしめた。
「なんで！　八時半までに着けばいいんでしょ！　そういう決まりがあったんならあたしが悪かったけど、知らなかったんだからしょうがないじゃん！」
怒りのままに、声を荒らげる。男は眉根を寄せ、手を顎に当てた。
「知らなかった？」
不可解だといわんばかりに、じろじろとナノカを見る。それから、もしかしてとつぶやいた。
「あなたは、今日から転校してきた……」
「こんなのって、横暴だよ！　正義の道に反するよ！　頭に、きた――――！」

男がなにかをいいかけたようだったが、ナノカの耳には届かなかった。完全に頭に血が上り、周囲が見えなくなっていた。
ガシリと、両手で門をつかむ。
「うにゅにゅにゅにゅ……っ！」
冗談のつもりではなかった。どういうわけか、できるという気がしていた。
いまなら、立ちふさがる鉄の門を、持ち上げて放り投げてぐしゃぐしゃにしてポイすることが可能だと、可能に違いないと、確信があった。
「強、行、突、破――！」
ナノカが十人横に並んでも、まだ足りないのではないかという巨大な鉄門が、ぎしぎしと音をたてる。握りしめている部分は熱を帯び、指が食い込んだ。まるでマシュマロのように。
「ちょ……な、なにを……？」
メガネの男が、数歩下がる。震える手でメガネを持ち上げた。おそらく、これからなにが起こるのかを察したのだろう。
しかしナノカには、止まる気はなかった。時間内に校門を越えることが、いまの彼女にとってすべてだった。
「うりゃあ――！」
とうとう、鉄門すべてが、レールから引きはがされた。
ナノカはそれを、両手でえいやと持ち上げる。砂と、コンクリートのかけらのようなものが、ぱらぱらと落ちる。
「てい！」
さらにそれを、頭上へ向かって放り投げた。ナノカは空を見上げ、タイミングを見計らって跳躍した。空中で、しかも片手で鉄門をキャッチして、手紙を書き間違えたときのように、ぐしゃぐしゃと丸めていく。正確には、ものすごい力での圧縮だ。空気の隙間を一切なくし、鉄そのものの密度を高め、できる限りに小さく。
「――は！」
そして、最終的には、だれもいないグラウンドめがけて、ポイし

た。
ズシン――地面が揺れる。
ナノカは華麗に着地した。
ツインテールが、ワンテンポ遅れてふわりと落ちる。
時計を見た。八時二十五分。
「セーフ！」
ごく機嫌良く親指を立てる。これでなんの問題もない。
「じゃ、あたし、行くね」
もはや、ナノカの行く手を阻むものはなかった。ナノカは軽い足取りで、男の横を通り過ぎる。情けなくも、男は尻餅をついていた。メガネがズレている。
「ちょ……ちょっと、待っ……」
男は手を伸ばしかけたが、結局は下ろした。
ナノカはそのまま、カバンを前後に振りつつ、スキップで校舎へと入っていった。

scene_2　「ヒーローだもの」

三ッ山小亜羅には、憧れの少女がいた。
恋、という言葉で安易に片付けて欲しくはない、宇宙よりも大きな思い。
過去形にしているのは、その少女と会うのが、実に十二年ぶりだからだ。
教室の窓から校門を見ていて、すぐにわかった。
ツインテールの美少女。
鉄門を軽々と持ち上げて、小さく丸めて放り投げた、あの美しい身のこなし。
惚れ惚れした。
手紙のやりとりをしていた十二年間、送られてくる写真を見て想像を膨らませてきたよりもずっとずっと、彼女は強く美しかった。
「なんて、素敵なの……！」
両手を組んで、うっとりと虚空を見つめる。
だから、彼女がどうやら職員室に呼ばれたらしいとわかったときには、三ッ山家の権力で全職員を解雇してやろうかと思ったぐらいだ。しかし、ほかならぬナノカ自身が、それを望まないだろう。
それでも、教室から飛び出すぐらいのことは、しても良いはずだ。いままでの小亜羅には、いくら担任の教師が来ていないといっても、始業ベルが鳴ってから教室を出るなどと、考えられないことだった。
しかし、いまは違った。
愛の力だ。
「ナノカちゃん……！」
焦る気持ちを抑えて、廊下を駆ける。
愛しの彼女は、どこにいるのだろう。まだ職員室に監禁されているのだろうか。だとすれば、自分が救い出さなければ。

縦に巻いた長い黒髪をなびかせて、階段を駆け下りる。
そうして、一階へと続く踊り場で、意中の人との再会を果たした。
「ナノカちゃん！」
勢いのままに名を呼んで、それから急に恥ずかしくなる。
身をよじり、頬を染めた。
「あの……、お、お久しぶりね」
緊張で、少しだけ声が震えた。ナノカは目を見開いて、すぐに小亜羅に飛びついた。
「こあらちゃん！　久しぶりだね！　ねえ、あたしたち、同じクラスなんだって！　また一緒にいられるね！」
笑顔全開だ。小亜羅は思わず胸を押さえる。
動悸、息切れ。鼻出血までしそうだ。
「……三ッ山財閥の令嬢が、この野蛮な転校生とお知り合いなんですか？」
一緒に階段をのぼってきたらしい男が、冷淡にいう。
小亜羅はまったく躊躇せず、男を睨みつけた。
同じクラスの羽島万太。成績優秀な生徒会長。家が貧乏らしく、学費と寮費を免除されている。その代わりといわんばかりに、学校での雑務をなんでもこなし、融通の利かない姿は「校長のイヌ」と囁かれる。
「近くてよ！　もっと離れなさい！」
ぴしりといってやると、羽島万太は気分を害したようだった。眉をひそめ、ナノカから一歩分離れつつも、なにかいいたげだ。
「思っていることは、はっきりいったらどうかしら。男としてみっともないわ」
そこへさらにたたみかける。羽島万太の眉間の皺が深くなる。
「では、はっきりいうがね。もうホームルームも始まっているんだ。三ッ山さんは、どうしてここへ？」
しかし、こたえたのは担任の竹ノ内だった。白髪交じりのナイスガイと評判が高いが、小亜羅はそうは思わない。小亜羅にとっては、

可もなく不可もなくといったところの、数学教師だ。
小亜羅はやっと、状況を思い出した。ナノカは竹ノ内と、ついでに羽島万太と、教室へ向かっているところだったのだ。感動のあまり飛びついてしまったが、あまり淑女らしい行動とはいえない。
「もうしわけありません、先生。わたくし、どうしても野中さんに早くお会いしたくて」
非を認め、素直に謝罪する。しかし、竹ノ内は怒っているという様子ではなかった。
「いや、まあ、それはいいんだが……」
「あたしとこあらちゃんは、幼稚園のころからすごく仲が良くて、引っ越しちゃってからもずっと手紙のやりとりをしてたんですよ。ねー！」
ナノカが小亜羅の両手をとり、「ねー！」のタイミングで身体全体を傾ける。
小亜羅は鼻を押さえた。
「もう、ナノカちゃんったら……！」
エキサイティングゲージ上昇中。その様子を胡散臭げに羽島万太が見ていたので、小亜羅は慌てて口の中で咳払いをした。取り乱してはいけない。
「つまり二人は、幼なじみということなのかな。では、聞くが……」
竹ノ内は、声をひそめた。
「野中さんのあの……超人さというのは、昔からなのか？」
一瞬、場の空気が冷えた。
羽島万太が、ふっと目線を外し、遠くを見る。トラウマにでもなったのだろうか。小亜羅にしてみれば、間近で見ることができて羨ましい限りなのだが。
「あたし、なんであんなことできたかわかんないんだよねー」
ナノカだけはお構いなしに、春の空気をまとっている。
では、覚えていないのだろうか――？　小亜羅は小首をかしげた。
おそらく、そうなのだろう。彼女が花ノ宮町にいたのは、五歳ま

でだ。当時から天真爛漫を絵に描いたような少女だった。つまり、思慮深さとはどちらかというと無縁の。
覚えていないとしても、おかしくはない。
「ナノカちゃんは、ヒーローなんです」
教師に話しているというのに、野中さんと改まって呼ぶことも忘れ、小亜羅は熱を持った口調で断言した。
「幼いころ、わたくしは引っ込み思案で、よく男の子たちにからかわれていました。でもいつだって、ナノカちゃんがわたくしを助けてくれました。わたくしだけじゃなくて、この町で困っている人がいたら、いつだって飛び出していって、だれだって助けちゃう、そんな女の子でした」
そうだったっけと、脳天気にナノカがハテナマークを飛ばしている。小亜羅は、そうよとうなずいて、光の宿った強い瞳で、竹ノ内を見た。
「ナノカちゃんは、ヒーローだもの。超人的なのは、あたりまえです！」
断言した。
「いや……そういうことじゃ……そういうことか？　いやいや……んん？」
竹ノ内が額を押さえる。
「というより、そもそも、ヒーローというのは女性に対して使わないでしょう」
眼鏡を上げながら、冷静に羽島万太がつっこむ。
「うるさくてよ、イヌ」
「イヌ！」
羽島万太がのけぞった。小亜羅はふふんと目を細める。彼のことは好きでも嫌いでもなかったが、今日最初にナノカと接触したという一点において、小亜羅のなかで一気に敵にランク付けされたのだ。
「説明しよう！」
突然、声が響き渡った。

それはまったく、あまりにも突然だった。小亜羅は周囲を見る。広くもない踊り場には、小亜羅とナノカ、竹ノ内と羽島万太の三人だけだ。

では上からか――見上げると、なかなか現れない転入生のことが気になったのか、2―Aの面々が集まってきていた。野中ナノカの超人さを目撃していた生徒も多いので、気になるのも当然だ。

しかし、彼らも声の主が誰なのかと視線を動かしている。

「下か！」

同じことを考えたのか、羽島万太が階段から身を乗り出す。

小亜羅も同じようにのぞき込み――

絶句した。

見知った顔が、白衣をはためかせ、拡声器を片手に、階段を駆け上ってきていた。

「お兄ちゃん？」

ナノカが驚いている。だがもっと立派に驚いても良いだろうと小亜羅は思う。

仕事は！

小亜羅は心中でつっこんだ。ナノカの家族事情はすべて把握している。野中ヒロシは花ノ宮大学に研究員として勤務しているはずだ。この時間にここにいていい人物ではない。

周囲の目など一切気にもとめず、野中ヒロシは踊り場へ到着すると、窓を開け放った。わざわざそこに左足を乗せ、右手を腰にあて、左手で拡声器を口にあてる。顔はぐるりとギャラリー目線。

「ナノカは幼きあの日、ナゾ仮面と契約をした。それにより、野中ナノカは、花ノ宮町にいる間だけ、超人的なパワーを発揮することが可能となった。この地を離れて十二年、もはやあの力は失われたかに思えたが、そうではなかった！　つまりナノカは、花ノ宮町限定、美少女ヒーローだったのだ――！」

右手で白衣のポケットをまさぐり、小型音楽プレイヤーを取り出す。スイッチを入れた。

ジャジャジャジャ、ジャジャジャジャ、ジャンジャン、チャララー。
ヒーロー、ヒーロー、美少女ヒーロー！
美少女ヒーロー、ナ、ノ、カ！
テンションの高い曲が流れる。
本人が歌っているのは明らかだった。
「これが、変態……！」
羽島万太が未知との遭遇に息をのんでいる。
「いやあ、ナノカがこっちに住むっていうからさ、一応イロイロ用意してたんだ。無駄にならなくてよかったよ。ささ、ナノカ、コスチュームだぞー」
「お兄ちゃんったら、仕事はどうしたの！　あたしのあとつけてたんしょ！」
ナノカは怒り心頭のようだったが、ほかにも怒るべき点は満載なのではないだろうかと小亜羅は思う。そして同時に、野中ヒロシの差し出したレースだらけのミニスカコスチュームは実の良い仕事だとも思う。
「お久しぶりです、お兄様」
小亜羅はスカートの両端を持ち上げて、丁寧に一礼した。この兄に対してなら、ある程度の耐性がある。十二年前よりよほどパワーアップしてはいるが、基本は変わっていない。つまり変態だという事実は揺らいでいない。
また、彼には感謝の念もあった。兄ヒロシが花ノ宮大学に勤務することが決まったからこそ、転勤を繰り返す親元を離れ、ナノカもこの町に住むことができるようになったのだ。
「やや、小亜羅ちゃんじゃないか！　いやー、理想的に成長したなー、かわいいなー。いいぞ、美少女ヒーロー親友ポジション、しかもお金持ち、完璧だな！」
ビシッ、と親指を立てる。鼻息が荒い。小亜羅は少し目線を外した。予想していても引く。

「ええと……つまり、野中さんの保護者の方ですね？」
竹ノ内が、冷静にいう。白い歯を見せて、ヒロシがうなずいた。
「もちろんですとも、先生！」
「詳しいお話は、また放課後に伺いますので、とりあえずここは……」
「おい、なんだあれ」
にわかに、上階がざわめいた。
すっかりギャラリーと化していた２－Ａの生徒が、窓から空を見上げている。野中ヒロシが足をかけている方向とは、反対側――グラウンドの方だ。
「なになに？」
ナノカが階段を駆け上がっている。羽島万太は、どうせくだらないことでしょうといわんばかりに、眉間に皺を寄せて立っている。
「おい、もうとっくにチャイムが鳴っているだろう。早く教室に……」
竹ノ内が担任としてごくあたりまえのことを口にする。しかし数人の生徒が、それを遮った。
「先生、空に城が……」
「あの城、なんですか？」
返事は期待していないのだろうが、そう問いかける。
「……城？」
羽島万太が、眼鏡を押さえる。
「城？」
小亜羅も、つぶやいた。
そして階段を上り、クラスメイトたちの隙間から、空を見上げる。
「お城だ！　しかもファンタジーなやつ！」
ナノカが叫ぶ。
空には、いかにも中世を思わせるヨーロッパ調の城が、どどんと浮かんでいた。

scene_3　「敵がいるはずです」

それはたしかに城だった。
城としかいいようがない。
外観はヨーロッパに現存する古城を思わせるが、しかしそれにしてはあまりにも真新しい。テーマパークに建設された城、といったほうが近いかもしれない。
いずれにしても、異常なのは、その姿形ではなかった。
場所だ。
花ノ宮高校上空に、浮かんでいるのだ。
羽島万太は、メガネを押さえた。
朝から超人的な力を持つ転入生を間近で見て、今度は空に浮かぶ城。
夢、かもしれない。
だったらいいなと切に思う。
「本当に、まったく、心当たりがないというのかね？」
花島校長が、重々しく問いかける。
万太は、野中ナノカと共に、校長室へ呼び出されていた。授業どころではなかった。上空に城が浮かんでいる状態で、さすがに教科書を読んでなどいられない。
「だから、お城のことはぜんぜん知りません、ってば。ヒーローがどうのっていうのも、よくわかんないし」
ナノカがはきはきと答える。彼女の気持ちに呼応するように、ツインテールが跳ねた。
「あたしだって、混乱してるんですよ。ねえ、万太くん」
突然話題を振られる。万太は咳払いをした。
本当は、ナノカの兄がこの場にいればと思う。しかし彼は、ナノカに破廉恥な衣装を押しつけたかと思うと、さっさと姿を消してしまった。

「彼女をフォローするつもりもありませんが……、見る限り、彼女がなにも知らないというのは本当のようです。城が出現した際には驚いていましたし……それに、校門を持ち上げた力も、感情が高ぶった際の一時的なもののようでした。クラスメイトにいわれ、教室でも様々なことを試みていましたが、まったく常人と同じでした」
「そうなんですよ、机を曲げてみろとか空飛んでみろとか、いろいろいわれましたけど。なにもできませんでした」
しきりにナノカがうなずく。だから早く解放しろといわんばかりだ。転校初日に校長室に拘束されるのは、喜ばしくない事態だということは理解できる。
しかし――万太は、横目でじろりとナノカを観察した。
本当に、無関係なのだろうか。
彼女が驚異的な力を発揮してすぐに、あの城が出現したというのに。
「たとえ自覚がなくとも、彼女となんらかの関わりがあるというのは、充分に考えられるでしょうね」
思ったままにそういうと、ナノカが驚いたように万太を見た。
「なんで！　だから、知らないっていってるじゃん！」
「あなたが知る知らないに関わらず、ということをいっているんですよ」
「ええ？」
それほど難しいことをいった覚えはなかったが、ナノカの許容量を超えたようだ。それ以上噛みついてくることもなく、眉間に皺を寄せ、どうやら言葉の意味を考えている。
「校長先生も、そうお考えなんですよね？」
万太がそういうと、花島校長は肯定するでも否定するでもなく、ううむと唸っただけだった。
しかし、万太はある程度のことは理解し、そして推理していた。城が出現してから、校長室に呼ばれるまでの数十分、調べられることはいくらでもあった。しかも、花ノ宮高校の生徒たちほとんど全

員があの城に興味を持ち、それぞれ協力し合ったのだ。
「何のために、彼女と僕をここへ呼んだのか、わかっているつもりです。僕は生徒会長として、彼女が誤った行いをせぬよう、常に監視します。それが、花ノ宮高校を守る僕の使命です」
「常に監視！」
ナノカが甲高い声をあげる。しかし万太は無視を決め込んだ。
「ですから、どうぞご安心を。あの城がいったいなんなのか、彼女が原因に関わっているのだとして、どうすれいいのか――全力で、問題解決に努めます」
「う、うむ。君がそこまでいうのなら……。わかった、では彼女のことは、君に任せよう」
花島校長が、重々しくうなずく。万太は深く一礼し、踵を返した。長居は無用だ。
ちらりとナノカを見る。着いてこいと目で告げる。アイコンタクト。
しかしナノカは、まったく気づかなかった。
「校長先生。あのお城のことなんですけど、クラスのみんなで……」
「野中さん」
少々荒々しい声で、呼びかける。ナノカは驚いて、大げさに首をすくめた。
「え？　なに？」
「校長先生はお忙しいんです。行きましょう」
「あ、そっか。はあい。失礼しました！」
びしりと敬礼し、ナノカも校長に背を向ける。できるだけゆっくりと歩を進め、万太は扉を開けた。
「それでは、失礼します」
最後に振り返り、頭を下げる。
「失礼しました！」
いったばかりだというのに、ナノカも繰り返した。そっと扉を閉め、深呼吸。

じろりと、ナノカを見た。
「馬鹿ですか」
いわずにはいられなかった。いってしまってからすぐに後悔する。馬鹿だということはいちいち問うまでもなく明白だというのに、なんと愚かな質問をしてしまったのだろう。
「なんで！　どうして……校長先生に、いっちゃいけなかったの」
おや、と思った。万太の評価では、野中ナノカという女はもっと馬鹿にランク付けされていた。しかし彼女は、万太の言葉の意味を正確に理解し、声をひそめたのだ。
「訂正しましょう。馬鹿というのは失礼でしたね。やや馬鹿、ということに……」
拳が飛んだ。
万太のすぐ隣の壁に、ナノカの拳がめり込んでいた。
「つ、使えるんじゃないですか、その力」
「知らないよ、ちょっとムカっとしたら手が出ちゃったの」
「なんて危険な……！」
万太は息をのむ。ちょっとムカっとさせた程度で命が危険にさらされるとは。
「教室行きながらでいいから、ちゃんと教えて」
ナノカはふいとそっぽを向いてしまった。ツインテールをなびかせて、さっさと歩いて行ってしまう。
先に行かれてしまったのでは、教えるもなにもないじゃないか――そうは思いながらも、万太は長い足を武器に、走ることなくナノカの隣に並んだ。
「僕がこれから口にするのは、推測です。推測ですが、第三者に話すのは危険ですので、あなたの心にだけ、しまっておいてください。たとえばあなたのお兄さんや、三ツ山さんにもです」
「よしわかった、任せて」
あまりに軽々しい返答に、万太の脳に不安がよぎる。しかしここは彼女を信じることにしようと、腹を決めた。どのような形であれ、

彼女が当事者であることは間違いないのだ。
「あなたはこの町のヒーローだということですが……では、倒すべき敵は、だれなのですか。あなたに、心当たりが？」
「へ？」
ナノカは大きな目をまたたかせた。
「えっとー……町の平和を乱すちんぴらとか、んー、横暴な教師とか？」
「あなたの判断でやっつけるんですか？　そんなことをすれば、あなたが犯罪者になるだけです」
万太は息をつく。思ったとおりの反応だった。思ったとおり、彼女の脳は残念な作りらしい。
「いいですか、古来から、ヒーローといえば絶対の正義、倒すべき悪がいなくてはいけません。それは戦隊と名の付く前から、そう、スーパー戦隊と呼ばれる前から、ましてやスーパーヒーロータイムが始まる前から、決まっています」
「……え、え？」
「僕としては、リアルロボットより断然スーパーロボット、正義がいて悪がいて、悪者を倒して解決という爽快さを重要視します。まあ一概にはいえませんが……ロボットでいうのならば、そうですね、エルドランや勇者はすばらしかった。サンライズはもっと、ああいった夢のある……」
「万太くん？」
万太ははっとした。口元を押さえるが、もう遅い。
いったい自分は、なにを口走ってしまったのだろうか。ヒーローという言葉に我を失い、語ってはいけないなにかを、語ってしまったような。
「あ、いえ、いまのは、あくまで一般論を……」
「好きなんだねえ、そういうの」
ごまかせる気がしない。しきりにメガネを直す。
ナノカは足を止め、まじまじと万太を観察していた。万太はいた

たまれなくなり、目線を逸らす。
堅物、校長のイヌ――等々の言葉なら、慣れている。
だがもしかして、これは……オタクとかそういったことを、いわれてしまうのだろうか。断じてオタクではないというのに。自分程度のものがオタクなどと名乗っては、世のオタクたちにもうしわけないというのに。
いやそうではなくて、そういう方面のことは、いままでひた隠しにしてきたのだ。万太は咳払いをした。
「と、いうようなことを、あなたのお兄さんならいいそうではないですか？」
完璧だ――！　心の中でガッツポーズ。なんという完璧なごまかし術。
「うん、いいそう、いいそう。万太くんも好きなんだ。なんか、意外だねえ」
しかし、まったく通じなかった。万太は必死に頭を巡らせる。どうにかしなければ。
「でも納得したよ！」
しかし、続く言葉は、万太の予想とは異なっていた。
「生徒会長ってだけで、そんな徹底して頑張れるもんかなって、ちょっと不思議だったんだ」
「はい……？」
話の展開が読めず、万太はおそるおそるナノカに目を向ける。
どきりとした。
ナノカは、まるで満開の花が咲いたような笑顔で、万太を見ていた。
「万太くんは、花ノ宮高校の、ヒーローなんだね」
「……っ！」
万太は、心臓を押さえた。
得体の知れない衝撃。
「……？」

制服の上から、心臓をつかむ。形を確かめるかのように、慎重に。
おそろしく派手に、波打っていた。
あまりにも速い鼓動。
いったい、どうしてしまったというのか。
「い、いや、僕は……」
そんなことをいわれたのは、初めてだった。ヒーローなどではないと否定したいのに、上手に舌がまわらない。彼女をじっと見つめたのでは不審に思われるとわかっているのに、目が離せない。
なんという無防備な顔で、笑うのだろう。
どこも取り繕っていない、それがあたりまえであるかのような、眩しい笑顔。
「それで、万太くんの推理は……んーと、あたしがヒーローなんだとしたら、悪者もいるはずだ、ってこと？」
万太は我に返った。慌てて自身の胸を数回叩く。落ち着け落ち着けと、何度も念じながら。
「そ、そういう、ことです。あなたがヒーローとしてこの高校へ現れて、すぐに城が出現した……つまりあの城は、悪の城ということなのでしょう。ヒーローには――少なくとも女子高生ヒーローには、城は必要ありませんからね」
「なるほど。よくわかんないけど、そういうもんなんだ」
素直に、ナノカがうなずく。万太はメガネを光らせた。
「ですから、敵がいるはずです。おそらくは、この学校内に」
「ふんふん。だから、校長先生も？」
「敵ではないとは、いいきれませんからね。まあ、僕たちが調べた程度のことはすぐに向こうも調べられるでしょうが、敵かもしれないのにわざわざなれ合う必要もないでしょう」
万太は、教室へ続く階段を上ろうとして、足を止めた。まっすぐ突き当たりまで廊下を進み、中庭へ続くドアを開ける。
そこには、竹箒で掃除をしている用務員がいた。
「おはようございます」

「やあ、おはよう」
にこやかに、返される。慌ててついてきたナノカも、おはようございますと声を張り上げる。
「ちょっと、いいですか。空の城のことなんですが……」
万太がそう切り出すと、用務員は笑いだした。
「またそれか、なんの遊びだい？　よってたかって担ごうったって、そうはいかんよ。生徒会長も参加するなんて、よっぽどだねえ」
「ええ？　あの、おじさん……」
「いえ、それじゃあ。お掃除、いつもありがとうございます」
よけいなことをいいそうなナノカの腕をつかんで、万太はさっさとドアを閉める。
ナノカが物いいたげにこちらを見ていた。説明を求めているのだろうということはわかったが、慌てて手を離す。
「あの人は？」
「ここの用務員さんですよ。出勤は九時。城が出現するよりも、あとです」
簡潔に説明する。ナノカも、ひらめいたようだった。
「ということは……」
「情報を、整理しましょうか」
万太はメガネに手をあてると、にやりと笑った。

ｓｃｅｎｅ＿４　「冗談や遊びじゃないんだ」

ナノカは教室に戻ってすぐに、ノートを開いた。
前の学校のものを使っては混乱すると思い、今日持って来たのはすべて真新しいノートだ。そのなかで一番気に入っている、ピンクドットのノートにペンを走らせる。

☆　お城　わかってること　☆

一番上に、タイトル。
教室に来るまでの間に、万太と話したこと――そして、頭の中にあることを、まとめ始めた。

☆出現　五月一〇日　朝八時三五分ごろ。
☆大きさ　すごく大きい。お兄ちゃんの好きなゲームに出てきそう。　←帰ったら聞いてみる！
☆実在？　さわれるかどうかわからない。
☆

四つ目の☆を書き、ペンを取り出す。☆をぐるぐると塗りつぶした。重要事項だ。

★お城が出てきた時に校内にいたひとにしか、見えないっぽい。
・クラスのみんなも、ほかのクラスの子も、見える。
・先生たちにも見える。
・今日休んでる佐橋くんには見えないみたい（電話で呼び出して見てもらった！）。
・九じに来た用む員さんにも見えない。
・お兄ちゃんにも見える（学校関係者じゃないけど、そのとき

いたから？）

つ　ま　り　！

敵は学校内にいるだろうって、万太くん（生徒会長！）がいってた。

「うーん。敵……、敵かあ」

ナノカは「敵」に赤ペンでぐるぐると丸をつけた。

黒板を見る。

二ーAのみんなが一致団結して、知り合いに電話をかけたりインターネットの質問版に書き込んだり、あの手この手で調べたことが、書き出されていた。過去にも空に城が出たというような情報は得られなかったようだが、それでも、出現時に校内にいた人間にしか見えないらしいということは、彼らが導き出したことだ。

そのなかで、幽霊という二文字が、目を引いた。

幽霊を見た、という証言があったのだ。まだ名前と顔が一致しないが、いったのは水無月という背の高い女子生徒だ。黒板に書かれていることを、そのまま写す。

☆教室で幽霊を見たような気がする。水無月景子。（ちょうど城が出現したころか、その前後）

「じゃあ、敵……が、幽霊、とか」

もちろん、関係ないかもしれない。そもそも水無月景子の気のせいかもしれない。

ほかにも、朝から腹が痛いだの、鼻炎を発症しただの、胡散臭い情報も雑多に書かれている。さすがにそれは、書き写しはしないが。

ナノカは、ペンの尻で、顎をいじった。

そもそも、なぜ、敵がいるのか。

丸をつけた「敵」の文字から、矢印を引く。

あたしがヒーローだから？

付け加え、それから考えた。

どうして自分がヒーローなのかといえば、ヒロシのいっていたとおり、幼いころにそう願ったからだ。いわれてみれば、そんなお願いをしたようなしなかったような。昔は、無敵なんだぞとかなんとか、調子に乗っていたような覚えもあった。だがそのあたりの記憶は、ひどくあいまいだ。五歳のころのことなどなんとなくしか覚えていないし、そのころ自分の力がものすごいものだと思っていたとしても、不思議はないような気がする。時々会う四歳の従兄弟も、オレは最強のヒーローだとかなんとか叫んで、おもちゃの剣を振り回している。

「じゃあ、あたしのことも書いとこうかな」

☆　ヒーロー？　☆

☆力　怪力になるみたい。強くなる？

☆足　すごく速く走れた。たぶん。

☆空　飛べない。

★いつも使えるわけじゃない。よくわかんない。

書き出してみるものの、たいした情報ではなかった。

ナノカはため息をついて、ノートから視線を外す。

クラスメイトたちは、ああでもないこうでもないと、城についての議論に花を咲かせている。それは二ーAだけではなく、どうやらほかのクラスでも同じようなことになっているらしい。

教師たちも混乱しているのか、未だに現れない。緊急会議でもしているのかもしれない。一応黒板には自習の二文字が書かれていた

のだが、あっというまに消されてしまった。
「ナノカちゃん、熱心なのね」
楚々とした身のこなしで、三ッ山小亜羅が近づいてきた。
だれもが席を立ち、移動し、好き勝手にやっている。ナノカの前のイスも空いているのを見て、小亜羅はそこに腰を下ろした。
「お城のことでしょう？」
ノートを覗いてくる。ナノカはわけもなく、泣きそうになった。
せっかく、また小亜羅と一緒に、楽しい高校生活が始まると思っていたのに。どうして、こんなことになってしまったのだろう。
「どうしよう、こあらちゃん」
具体的な感情は自分でもわからいままに、弱音を吐く。小亜羅は目を見開いて、何度もまばたきをした。長い睫毛が揺れる。
「ナノカちゃんったら、らしくないわ。お空にお城が出てきて、ナノカちゃんはヒーローで、こんなに楽しそうなことってないじゃない？　どんな敵が出てきても、ナノカちゃんがやっつけちゃえばいいんだわ」
「敵？」
あれ、と思って聞き返す。たしかその話は他言無用だと、万太にいわれたはずだ。
「えと……敵？」
「敵、でしょう？」
小亜羅は、赤マルのついた「敵」の部分を指さした。それはそうだ。ノートに書いてしまったのだから、口に出さなくても、見られればそれまで、一目瞭然だ。
「それって、素敵だと思うわ。敵、しかもこの校内、もしかしたらお友達かも……？　とっても、浪漫だわ！　あとは……そうね、囚われのお姫様がいたら、完璧ね。想像するだけで、わくわくしてしまうわね」
両手を組んで、小亜羅がうっとりと空想の世界にふける。ナノカを慰めようとしているのかもしれない。

しかしナノカは、それどころではなかった。急いで首を回す。羽島万太はどこだろう。ぐるりと見回すと、右側直線上、廊下側の端に、羽島万太はすわっていた。しっかりとこちらを見ている。というか睨んでいる。

ゴメン！

口の動きでいった。

バレちゃった！

両手を合わせる。

でもいいよね！

てへ、と舌を出す。

「いいわけがないでしょう」

「え、テレパシー？」

「見ればわかります！」

思わず聞き返すが、万太はあっさり否定して、憤然とした足取りでやってくると、ナノカのノートを取り上げた。無言でざっと見て、すぐに閉じる。

「ふん」

鼻で笑った。

ナノカの拳に力が宿る。しかし我慢する。

「預かっておきます」

絶対零度の目で見下ろして、そのまま持って行ってしまった。

律儀に自分の席に戻って、イスにすわる。教科書を開いて、どうやら本当に自習しているようだ。

「うう、持っていかれちゃったよ……」

返してと食い下がってもいいのだが、約束を破ってしまったのは自分だ。ナノカはがっくりとうなだれる。

「かわいそうなナノカちゃん。横暴ね、生徒会長」

小亜羅が、よしよしと頭を撫でてくる。ナノカは甘えて抱きつきたい気分だった。なによりも自分が情けない。

「ねえ、今度学校の帰りに、お買い物に行きましょう？　わたし、

素敵なノートをたくさん差し上げたいわ」
「いいよう、自分で買うよ。でもお店とかわかんないから、一緒に行こう」
「ええ、もちろん」
幼いころと同じように、小亜羅が柔らかく笑う。美少女だなあと口には出さずにしみじみと感心しながら、買いに行くなら今日がいいなとナノカは提案しようとする。
「こあらちゃん……」
「席につけー！」
しかし、登場した担任教師竹ノ内の怒声が、それを遮った。
「じゃあ、またのちほど」
小亜羅が席を立ち、戻っていく。ナノカはひどく残念な気持ちでそれを見送った。もっと話したかったのに。
「まったく、自習だといったのに」
白髪交じりのナイスガイ、竹ノ内がそういって、黒板を消していく。しかしその声は、呆れてはいるが真剣に怒ってはいないようだった。生徒たちも萎縮している様子はなく、ごめんなさーいと軽く返す声まで聞こえる。
慕われてる先生なんだろうな――ナノカはぼんやりと、そう思った。新しい教室、新しいクラスメイト、新しい先生。
城や力のことは気になるが、学校生活自体は普通に行われるはずだ。とりあえずは気にしないでおこうと、二番目にお気に入りのオレンジドットのノートを取り出す。
「まあ……いろいろあって遅れてしまったが、授業を始める。それぞれ気をしっかり持って、空を見ずに、取り組むように」
ハスキーボイスで、淡々という。いわれてしまえばよけいに、ナノカは空を見上げた。
やはり、城が見える。
「もしも降ってくるようなことがあっても、まあおそらくは、ちょうどグラウンドに収まるだろう。念のため、グラウンドでの体育は

中止だ。休み時間にも、行かないように。城のことは気にしない、以上！」
それは、クラスでも話題になったことだった。だが、そもそも、人によっては見ることすらできないのだから、実体があるのかどうかが疑問だ。
ナノカは、指先でくるくると前髪をいじった。
とりあえずは、授業。自分にそういいきかせ、できるだけ考えないようにする。
「では、数学の問題集を出して。一七ページの……」
ナノカは、慌てて問題集を取り出した。ページを開いて、手の甲で折り筋をつける。周りを見ると、ノートを出しているもの出していないもの、まちまちだ。直接書き込むか否かは、自由なのだろうか。
聞いてみたほうが良いだろうかと、顔を上げる。
「……？」
眉をひそめた。
竹ノ内の様子が、おかしかった。
まっすぐよりも、少しだけ左――どこかを、だれかを、見ていた。あるいは、その瞳にはなにも映っていなかったのかもしれない。
動きが、完全に止まっていた。
「先生、一七ページの、どれですかー？」
一番前の生徒が、もっともな質問を投げる。
しかし、答えはない。
竹ノ内は、ゆっくりと、首を動かした。
まるでさび付いたねじのように、ぎこちなく、目線が移動する。
その目がたしかに、ナノカを見る。
「全員、問題集を閉じて」
静かな声で、そう指示を出した。
生徒たちは不思議そうながらも、やれといわれるよりはやるなといわれるほうがいいのか、文句もいわずに閉じていく。しかしナノ

カは、動けずにいた。
竹ノ内から、目が離せない。いま、間違いなく、目が合っているのだ。
「えっと……先生？」
こちらに注意を向けていることは明白だった。おそるおそる、呼びかけてみる。
竹ノ内の唇が、両側につり上がった。
「特別授業を行う。空の城についてだ」
何事もなかったように、その目がナノカから外された。ナノカはほっと胸をなで下ろす。教師から凝視されるのは良い気分ではない。
「城のこと気にするなっていったじゃん」
「なにかわかったんですか？」
質問が飛ぶ中で、竹ノ内は力強く、拳で黒板を叩いた。
しん、と静まり返る。
ナノカは息をのんだ。皆が戸惑い、怯えているのがわかる。普段はそんなことをしないのだろう。
「あの城は、悪将軍の城だ」
ワルショウグン……教室内がささやかにどよめいた。
「悪将軍は、世界征服をたくらんでいる。手始めにこの花ノ宮町、花ノ宮高校を手中に収めようとしている。悪将軍に逆らえば、君たちの命は保証されない」
まるで、兄の好きなヒーローもののような話だ。ナノカは、竹ノ内をじっと見た。
先ほどまでとはまるで別人だ。なぜ突然、そんなことをいいだすのだろう。
「しかし、心配することはない」
竹ノ内は、さわやかな笑顔を生徒たちに向けた。
「このクラスには、ヒーローがいる！　だいじょうぶだ、きっとヒーローが、悪将軍をやっつけてくれるさ！　なあ、野中！」
クラス中の全員が、ナノカを見るのがわかった。

ナノカは硬直する。
自分が無関係ではないのだろうと、薄々気づいてはいた。万太に指摘されただけではなく、偶然にしてはできすぎだろうと、自分でも感じていた。
しかし、これほどまでに、ダイレクトにいわれるとは。
「あ、あたし、ですか？」
「もちろんだ、野中ナノカ」
竹ノ内が笑う。奇妙な笑みだ。どうしてこの状況で、それほどまでに爽やかに、笑えるのだろう。
「おまえは、ヒーローだからな。どんな敵にも打ち勝つと、信じているぞ」
「きゃあああっ！」
甲高い悲鳴が、こだました。
最初は一つ、しかし一人によるものではなかった。2―Aの女子生徒たちが、口々に悲鳴をあげていた。
「ちょっと、なにするの！」
「やめて！」
襲いかかっているのは、男子生徒だ。彼らは一様に無言で、うつろな目をしていた。女子生徒を羽交い締めにするもの、上にのしかかるもの、まさに殴りかかろうとしているものもいる。
それはナノカも例外ではなかった。隣の席にすわっていた、見るからにおとなしそうな小柄な男子生徒が、両手を降り上げて飛びかかってきたのだ。
「わわ！」
とっさにかわし、竹ノ内を見る。彼は笑顔で、教室内をただ観察している。
ナノカはぞっとした。どういうことだろう。どういうつもりで、彼はこの状況を傍観しているのだろう。
「さあ、野中！　戦わないと、クラスメイトのピンチだぞ。これは冗談や遊びじゃないんだ」

まるで、はやく跳び箱を跳べとでもいうかのような口調で、当然のようにいい放つ。
ナノカは拳を握りしめた。
しかし、ためらう。敵ではないのだ。どう見ても、自分の意志ではないというのに、クラスメイトになったばかりの彼らを、殴り倒せというのだろうか。
「ナノカちゃん！」
小亜羅の悲鳴が聞こえる。彼女もまた、男子生徒に襲われていた。机の上に押し倒され、首を絞められようとしている。
「ナノカ、ちゃん……！」
「こあらちゃん！」
考えるよりも先に、身体が動いた。
「こあらちゃんを、離せ！」
身体をつかみ、むりやり引きはがす。そのまま持ち上げて、頭上でぐるぐると回した。
「悪、即、斬――！」
叫んで、投げ飛ばす。数人の男子生徒にクリーンヒットし、団子のようにまとめて壁に激突する。
しかしナノカは、止まらなかった。
「あたし、怒ったからね……！」
ゆらりと両手をかまえる。武道の経験などない。しかしどうすればいいのか、本能で理解していた。
つかんで投げる。
それしかない。
「女の子たちから、離れなさい！」
床を蹴った。男子の制服だけを目標に、次々とつかみかかる。振り回して投げつけて、の繰り返しだ。彼らも一応は抵抗したが、それはほとんど形をなさなかった。圧倒的なパワーと、スピードの差。まるであらかじめそうなることが決まっていたかのように、男子生徒たちはなすすべなく、放り投げられていく。

「野中さん……！」
「ナノカちゃん、がんばって！」
女子生徒たちの、応援の声。しかしナノカには、それすらほとんど聞こえてはいなかった。
「てりゃ――！」
あっというまに、山ができた。
倒れ重なった、男子生徒の山だ。
ふう、と息をつく。
額の汗を拭った。
「まだ立てるやつは、かかってきなさい！」
机の上に仁王立ちする。女子生徒たちが歓声をあげた。
「かっこいい――！」
「ナノカ――！」
それほど、悪い気はしない。ナノカはえへへと頬をかく。
「あなたは、馬鹿ですか……」
積み上げられた山の、下の方から這いだして、弱々しい声がいった。
「あ、万太くん」
万太は激しくせき込んで、転がっていたメガネをかけ直す。それから、教卓の向こう側、腕を組んで様子を見守ってる竹ノ内を、指さした。
「まだ、終わりじゃないでしょう……！」
「え。あ、先生？」
しかし、それで終わりだった。
竹ノ内は、まるでゼンマイが切れたかのように、足下から崩れ落ちた。顔から床に激突し、がつんと重い音がする。
そしてそのまま、動かなくなってしまった。
「せ、先生……？」
ナノカが近づこうとしたが、それを制して万太が慎重に近づいていった。復活したほかの男子生徒が、さっと箒を差し出す。万太は

箒の先で、竹ノ内をつついた。
反応がない。
ナノカが竹ノ内の脇に座り込み、うつ伏せに倒れていた彼をえいやと仰向けにさせる。
白目を剥いていた。気を失っているのは明らかだ。
「彼が黒幕というよりは……だれかに操られていたと考えるのが、自然ですね」
ごく冷静に、万太がいう。
「どうしたの、いったいなにがあったの！」
けたたましい声と同時に、ドアが開け放たれた。２―Ｂの担任福原夏美が、ずっとドアを開けようとしていたらしい。
彼女は、２―Ａの惨状に、息をのんだようだった。
それはそうだろう。イスや机はめちゃくちゃに倒れ、男子生徒のほとんどは未だ山となっており、竹ノ内は気を失っているのだ。
「どういうこと？」
そういわれても、どう説明すればいいものか。
２―Ａの面々は、それぞれ不安げに顔を見合わせた。

scene_5　「心を、ひとつ」

「ただいまー」
聞こえた声に、野中ヒロシは玄関まで全力疾走した。愛しい妹を、両手を広げて歓迎する。
「お帰り、ナノカ！」
「おじゃまします、お兄さま」
「おじゃまします」
しかし、ドアを開けて入ってきたのは、ひとりではなかった。
愛しの妹がいるのは当然だ。
その幼なじみであり友人の三ツ山小亜羅が共にいるのも、うなずける。
問題は、もう一人だった。
「羽島万太です。突然もうしわけありませんが、どうしてもお兄さんからお話をうかがいたいと思いまして」
丁寧に頭を下げ、メガネを押さえながら、淡々という。
この男には、見覚えがあった。今朝、ナノカと校門で一悶着起こしていたやつだ。ナノカにはいえないがこっそりあとをつけて一部始終を録画していたので、まちがいない。
そこそこに背が高く、声が低く、もやしというほどにひょろりとしているわけでもなく、なによりも頭脳明晰を絵に描いたような男。そして礼儀正しい。
「敵か！」
ヒロシは直感した。こいつは敵だ。しかもお兄さんなどと。どこの馬の骨ともしれない男に、お兄さん呼ばわりされる覚えはまったくない。
「ええ、そのことについても、もちろん」
なに食わぬ顔で、羽島万太は肯定する。
ヒロシは、かっと頭に血がのぼるのを感じた。

こいつは、いまここで、倒しておかなければならない――ヒーロー（マニア）としてのソウルが燃えさかる。
「あとは、ナノカさんの幼いころの話なども……」
「お兄ちゃんは、認めません――！」
ヒロシの手が真っ赤に燃え、万太を倒せと轟き叫ぶ。
しかし、ひょろひょろと飛び出したヒロシの渾身の一撃は、ナノカの一喝によって完全に止まった。
「お兄ちゃん、どいて」
正確には、喝などではなかった。日常のシーンで見られるただのお願いだ。
しかし、ヒロシは激しく目を見開く。ナノカのテンションが明らかに低いのを、兄として感じ取ったのだ。その証拠に、いつも元気なツインテールが垂れ下がっている。
「ナノカ、どうしたんだ？　兄ちゃん今日、レーズンバターサンド買ってきたぞ。おまえの好きなキムラのやつだぞ。よし、日本茶を入れよう！　待ってろ！」
「うーん。食べるけど」
歯切れが悪い。ヒロシはゆっくりと首を左右に振った。
「なんてこった……ナノカ、いったい、なにがあったんだ？」
「お兄さまもご覧になったでしょう。今日、お空にお城が出現したんです。ナノカちゃんはもうてんてこまいで、それはもう大変な一日を過ごしたんですよ」
「城！」
ヒロシは手を叩いた。
空に城――たしかに見た。まちがいない。これは大ニュースだと思いつつ職場に戻り、いやあ大変なことになりましたねえと話題に出したが、おかしなやつ呼ばわりをされただけで終わったのだ。幻か気のせいか――そういう類のものだと思っていた。
「え、あれ、マジで？」
三人が、うなずく。

ヒロシのテンションが、いっきにマックス値にまで跳ね上がる。
「うおお！　ということはあれか、魔王の城か！　ナノカ、やったな！　倒すべき敵が現れたんだぞ！」
「お兄ちゃん、ちょっと黙って。あたし、着替えてくるから、二人とも休んでてね」
「んん……！　よし、黙ろう！　そしてもてなそう！」
ヒロシは宣言して、いそいそと茶の用意を始める。転入初日、疲れているであろう妹のために、今日は早退してきたのだ。ナノカの好きなブレンドティーは用意済みだったし、夕食の下ごしらえまで完璧だった。同じ理由で朝は遅刻しているので、ほとんど仕事をしていないわけだが。
野中家はそれほど広くはない。２ＬＤＫの、どこにでもある賃貸アパートだ。ナノカの自室というものも一応は存在するが、三人が座ってくつろぐほどのスペースはないため、ヒロシはリビングテーブルに茶を並べた。買い占めたレーズンバターサンドも器に盛る。
「ささ、どうぞ、小亜羅ちゃん」
クッションを置き、小亜羅を促す。
「ありがとうございます、お兄さま」
にこりと笑って、小亜羅は清楚な仕草で腰をおろした。
「帰れ！　といいたいところだがすわれ。ナノカの優しさに感謝するんだな！」
万太には敵意むき出しで告げる。万太はまったく動じることなく、ありがとうございますと会釈をした。ヒロシの示すままに、小亜羅の隣にすわる。
「……どうして、生徒会長まで一緒にくる必要があって？」
小さな声ではあったが、小亜羅がとげとげしいいかたをした。ヒロシはぴくりと耳を大きくする。
「いったでしょう、お兄さんに聞きたいことがあるんですよ。野中さんが、ヒーローとなったときのことや、その当時のことです」
「それはわたしが聞いておくから問題ないわ。そもそも、生徒会長

はナノカちゃんと仲良しでもなんでもないでしょう。男の子がいきなり家にくるなんて、ナノカちゃんの迷惑を考えたらどうかしら」
「……む、迷惑、なのでしょうか？」
「あたりまえだわ。ナノカちゃんはわたしといちゃいちゃするはずだったのに」
　ヒロシは想像した。ナノカと小亜羅のいちゃいちゃ。それは大変に素晴らしい。
「生徒会長は邪魔をしたかったのかしら？　ナノカちゃんを誘惑でもしたら許さなくてよ」
　ヒロシの耳がさらに巨大化した。
　誘惑だと？
「今朝からべたべたしちゃって。よろしくないわ。あなたがナノカちゃんに恋をするのは勝手だけれど」
「な、そ、そんなはずがないでしょう！　僕は生徒会長として、いえ、2—Aの一員として、積極的に事態の解決を……」
「ふん、イヌ」
「……っ！」
　ヒロシは心の中で腕を組んだ。なるほどとうなずきながら、ナノカ周辺人物相関図を描いていく。どうやらこの二人はあまり仲が良くない——というよりも、小亜羅が一方的に敵視しているようだ。
「お待たせー」
　そこへ、ナノカが合流する。ジーンズのスカートに白いシャツという、ラフな出で立ちだ。ヒロシは心の中でガッツポーズをとる。我が妹よ、なにを着てもかわゆし。
「ねえ、あたしね……今日あれからずっと、考えてたんだけど……」
　いつになく真剣な、思い詰めたような表情だ。
　ヒロシはナノカの分の茶を運ぶのも忘れ、妹に見入る。いやな予感がした。
「あたし、ヒーロー、やめられないかな」
「ナノカちゃん！」

小亜羅が立ち上がる。ヒロシは声も出なかった。
しかし、驚いてはいなかった。そんな気がしていた。
「ナノカちゃん、なにをいっているの？　せっかく、この町に帰って来られたのに……」
「当然ですね」
万太は冷静だ。まるで、こうなることがわかっていたかのようだった。
「あの城の存在や、今日のクラスでの事件……それがもしかしたら、自分と関係がある――それどころか、自分のせいかもしれないのならば、その考えに行き着くのは当たり前でしょう」
「でもそんなの……もし、ナノカちゃんと関係がなかったらどうするの！　ナノカちゃんがヒーローではなくなったとして、それでもお城はあのままかもしれないでしょう？」
小亜羅は必死だ。ヒロシは彼らの会話から、クラスでの事件とやらを想像する。なにか、ナノカにとってよからぬことがあったのはまちがいない。
「あのね、でもね。あたしがヒーローじゃなくなって、それで解決するなら、それがいちばんいいと思うの」
「そんなの……！」
小亜羅の目が潤んでいた。ヒロシは兄としてこの場をどうにかしようと思うが、どうすればいいのかわからない。そもそも小亜羅がなにに打ちひしがれているのかも、いまいちつかめないのだ。
それでも、知っていることは告げねばならないと責任感が疼く。
ヒロシは小亜羅を見据えた。
「小亜羅ちゃん。ナノカはね、昔……」
「お兄さまは黙っていてください！　これはわたしとナノカちゃんの問題です！」
「はい」
ヒロシは黙った。一瞬にして、ヒロシと万太は蚊帳の外に追いやられてしまった。

「こあらちゃん……あたし、小さいころ、本当にヒーローだったの？　なんかね、どうすればいいのかわからないの。急にヒーローみたいな力が使えるようになっても……」
「ナノカちゃんはヒーローだったわ！　いつだって、わたしを助けてくれたわ！　それに、ヒーローになりたいと願ったのは、ナノカちゃんでしょう？」
緊迫した空気だ。
ヒロシはとりあえず、すわった。
万太と一瞬だけ瞳を絡ませ、うなずき合う。これは口出しできないよねー、とアイコンタクト。
「そんなの……そんなの、ナノカちゃんらしくないわ。ヒーローをやめたいだなんて」
「あたしらしくないって、どうして？　あたしいままでずっと、ヒーローなんかじゃなかったよ？　小さいころのことは覚えてないし……」
ナノカは瞳を伏せた。ほんの一瞬、いいにくそうに息を切る。
「……どうすればいいか、わかんないよ。悪将軍を倒せ、とか」
「――っ！」
小亜羅の瞳から、涙があふれ出す。
しかし緊迫した空気をよそに、ヒロシはがっつり反応していた。なんだワルショウグンて。やばい超かっこいい。
「ナノカちゃんの……ナノカちゃんの、バカ――！」
拳が飛んだ。思いのほか鋭い右ストレート。ナノカの頬にクリーンヒットする。
小亜羅はそのまま、鞄をつかんで立ち上がった。お邪魔しましたと叫んで、野中家から出ていってしまう。
「こあらちゃん！」
当然のように、ナノカがそれを追う。
ガチャ、バタン。
ガチャ、バタン。

二回続く音。
そして残る、どうしようもない静寂。
「これと二人とか！」
ヒロシは心から叫んだ。どうしろというのか、この状況。
「いえ、問題ありません、お兄さん。むしろ好都合といっていいでしょう」
「ないよ？　オレその趣味マジでないよっ？」
「どの趣味ですか？」
ごく淡々と問われ、ヒロシは我に返る。そうだ、落ち着こう。こいつは敵だ。自分のポジションを思い出す。
しかし同時に、ナノカの兄としての威厳も維持する必要があった。今更ではあったが胸を張り、ごほんと咳払いをする。
「つまり……オレの屍を越えていこうと、そういうことだな？」
男前にいった。
「違います」
「あ、違うんだ」
ここで初めて考える。そして、思い出した。
最初から、聞きたいことがあるといっていたはずだ。
「で、聞きたいこと、とは……？」
シリアスにいった。
呼応するように、万太のメガネが光る。
「妹さんの、力のことです。彼女がいっていたとおり、空に出現した城は、ナノカさんと関係が深い可能性が高い。彼女がどうしてヒーローになるに至ったのか、お兄さんの知っている経緯を、教えていただけませんか？」
「ふうむ……経緯ね。いいけど、オレもガキだったからな。記憶の混乱がないともいいきれん」
ヒロシは立ち上がった。
窓辺に寄り、赤く染まりゆく空を見つめる。遠いあの日に、思いを馳せる。

「だが、そうだな……ナノカの協力者になってくれるというのなら――」
左手を腰にあてた。
勢い良く、振り返る。右手は親指と人差し指を立てて、顎の下に設置して決めポーズ。
「説明しよう！　ナノカは幼きあの日、ナゾ仮面と契約をした。それにより、野中ナノカは、花ノ宮町にいる間だけ、超人的なパワーを発揮することが可能となった。この地を離れて十二年、もはやあの力は失われたかに思えたが、そうではなかった！　つまりナノカは、花ノ宮町限定、美少女ヒーローだったのだ――！」
だー、だー、だ――。
完璧な口上が、こだまする。
もちろんリアルにはこだましないので、小さな声でヒロシが付け加えていた。かっこよさ演出というやつだ。
「それはもう、聞きました」
万太はまったく冷静だった。
「まず、ナゾ仮面というのは何者ですか？　契約というのは？」
「ああ、そういうことね。じゃあ最初からそう聞けよー。なんだよもー」
ヒロシはぶつぶつとぼやきながらも、よいしょともとの位置に腰をおろす。
「ナノカが五歳で、オレが十三のときだな。ナノカを公園で待たせといて、オレだけ近所のコンビニにあんまん買いに行ったんだ。ナノカが食べたいっていうからさ。そしたらそのとき、会ったらしいんだよ」
「会った、というと？」
「ナゾ仮面に」
「……」
万太が微妙な顔をして黙る。そんな顔をされても、嘘偽りをいっているわけではないので、ヒロシにはどうしようもない。

「や、なんか名乗ったらしいけど、それは忘れた。黒い仮面してたってのは、ナノカがいってたからまちがいない。そんで、魔法でなりたいものにならせてやるから、なにになりたいかいってみろ、みたいなことをいわれたらしい」
「不審者じゃないですか」
ヒロシは深くうなずいた。
「不審者だな」
それは疑いようがない。仮面をつけて少女に近づき、「魔法が使えるんだよー」などと、即通報レベルだ。
「それで、ナノカさんは、ヒーローになりたいと？」
「そうだ。まあ、オレがヒーローもんばっかり見せてたからな。この町を守るヒーローになりたいっつって、その結果が、花ノ宮町限定のヒーローってわけだ。実際引っ越してこの町を出てからは、超人的な力は使えなかった」
「なるほど……」
万太はなにやら考え込んでいるようだ。つられるように、ヒロシもあのころのナノカを思い描く。
「かぁわいかったなあ……」
当時五歳のナノカは、まさに無敵のヒーローだった。立ち向かえないものなどないと思っていたことだろう。事実、大人を相手にしても負けることなど決してなく、正義感に溢れていた。
「ナノカさんは、自分がヒーローだったということを、覚えていないようですが？」
「ああ……」
ヒロシの表情が、曇る。
それには、心当たりがあった。彼女がこの町に戻ってくることになったとき、またヒーローとしての力が蘇るんじゃないかという期待もあったが、不安があったことも事実だった。
だからこそ、コスチュームやテーマソングまで用意して、それでもナノカにはなにもいわなかったのだ。なかったことになったのな

ら、それでいいと思っていた。
「引っ越した先でな……まあ、ヒーローのつもりで、色々無茶しようとしたんだよ、あいつ。でも新しい町ではヒーローになんかなれなくて、ただの非力な女の子でさ、なんにもできないのにでかいことばっかりいうもんだから、まわりからは煙たがられて……要するに、友だちができなかったわけだ。いじめってほどでも、なかったけどな。かわいそうに、長いことふさぎ込んでたから……身を守るために、忘れちまったんじゃないかな」
膝を抱えて、一人で泣いていたナノカの姿は、いまでも忘れられない。嘘つきと罵られ、毎日のように泣いていた。
「小亜羅ちゃんは、しょっちゅう手紙送ってくれてさ、ナノカの心の支えになってくれたんだよ。オレにこの町での職場を紹介してくれて、ナノカが戻ってくれるように取りはからってくれたのも、小亜羅ちゃんだ。あの子はたぶん、ヒーローのナノカに、憧れみたいなのがあったんじゃないかな。だからあんなふうに、怒ったんだと思う」
「そういうことですか……」
万太がメガネを押さえる。
知ってることはこれで全部だといいかけて、ふと、ヒロシはひっかかりを感じた。
自分でも何度も口にした、「契約」という言葉。改めて考えれば、思い出すものがあった。
そんなものはナノカの聞き間違いか、それともナゾ仮面のはったりか……たいして問題ないだろうと思っていたのだが。
「その代わり、心をひとつ――」
ぽつりと、つぶやく。
「それは、なんですか？」
ああ、とヒロシは返事をして、とっさにごまかそうとした。しかしことの重大性に、結局は話すことにする。
「あの日、ナノカがいってたんだ。ヒーローになる代わりに、心を

取られたって。でもナノカはあのとおり、まったく普通だから、気にしてなかったんだが……」
「心を、ひとつ」
万太がうなる。ヒロシはナノカと過ごした日々を思い出そうと、記憶を探った。
失っている心など、本当にあるのだろうか。気づいていないだけで、もし本当にナノカがなんらかの心を失っているのだとすれば、それは大問題だ。
心を失うというのは、どういうことなのだろう。
「いますでに失っている、か……それとも、ヒーローとしての力を使うことで、失う？　いや、違うな。ナノカの願いはすでに叶ってるんだから、すでに心がひとつないって考えるのが、妥当か」
そういいながらも、釈然としない。
ヒロシにとって、ナノカは完璧だ。足りない心など、思いつかない。
「もしかすると……その心を取り戻せば、ナノカさんはヒーローじゃなくなるのかもしれない」
万太のつぶやきにうなずきながら、しかしヒロシは考えていた。
小亜羅のいうとおりだ。
もしそれでも、あの城が消えなかったとしたら、この町はどうなるのだろう――？

scene_6 「もはや無関係なのだから」

小亜羅は走った。無我夢中で、走った。どこに向かっているかなど考えず、ただナノカが追いつけないように、懸命に足を動かす。

冷静に考えれば、家のものに電話を入れればすぐにでも迎えが来るはずだったし、ほかにもたとえばどこかの店に入って隠れるとか、方法はあるはずだった。しかし気が動転していて、とにかく悲しくて、走ることしかできなかった。

「逃げないで、こあらちゃん！」

すぐうしろで、ナノカの声。

小亜羅は、立ち止まった。

逃げきれるはずなんて、なかった。そんなこともわからないほどに、感情が高ぶっていた。

肩で息をして、振り返る。ナノカはまったく息を乱した様子もなく、そこに立っていた。空は赤い。この町に彼女が立っている、ただそれだけで泣きそうになる。

「ナノカちゃん……」

小亜羅の声が、震えた。涙が流れそうになるのを、ぐっとこらえる。

小亜羅はナノカの肩をそっと抱き、よしよしと頭を撫でた。おそるおそる、ひどく繊細ななにかに触れるかのように。

小亜羅は力が抜けて、小さく笑った。いつの間にか、公園のすぐ近くまで来ていたことに気づく。意識していない、まったくの偶然だったが、小亜羅はこれは好都合なのではないかと思った。

「ねえ、ナノカちゃん。あそこで、お話しましょう？」

公園を指す。まだ何人かの子どもたちと、その母親らしい人影がある。

いつかのように、ナノカが一人になることはない。

「うん、いいよ」

「ふふ、決まりね」
小亜羅は手を伸ばし、ナノカの手を取った。にこりと笑って、公園へ歩を進める。幸い、ベンチは空いていた。
腰を下ろし、ナノカを見る。彼女の方が十センチほど背が高いので、見上げる形になる。
ナノカはどこか居心地の悪そうな顔をしていた。小亜羅は首をかしげる。
「どうしたの、ナノカちゃん」
「どうしたの、って……」
ナノカは指で髪をいじった。いいにくそう、というよりも、いいにくいですという感情が全身からにじみ出ている。
そういう、嘘のつけない、ごまかしのできいない性格も、小亜羅は好きだった。変わってないなと思いながら、静かに待つ。
「あの、ね。もう、怒ってないの？」
やがて、意を決したように、ナノカがいった。
いいにくいことほど小さな声になるものだが、ナノカの声はきっぱりとしていた。そういうところも、昔のままだ。
「怒ってるわ」
「えええ」
即答すると、ナノカの顔が情けなく歪む。
「あたし、こあらちゃんに嫌われたら、この町にいる意味ないよう」
「ナノカちゃんったら、そんなのズルいわ。怒れなくなるじゃない」
冗談ではなく、小亜羅はいう。ナノカがいなくては意味がないのは、自分だって同じだ。
いや、正確には、「同じ」ではない――小亜羅には幼いころからずっと、揺るがない、譲れないものがある。
自分のナノカへの思いは、それ以上だ。
ほかの誰よりも、たとえばあの変態の兄よりも、ナノカを想っている自信があった。
「ナノカちゃんはね、わたしのヒーローなの。あのね、ヒーローと

しての力があるからとか、そういうんじゃないの。ナノカちゃんはとにかく、わたしにとって、特別なのよ」
わかってもらいたいというよりも、ただ伝えたかった。しかし案の定、ナノカは困ったように眉を下げる。
「こあらちゃん……」
「仕方がないわ。だって、そうなんだもの」
小亜羅は、ナノカの笑った顔はもちろんだが、困った顔も、怒った顔も、全部が好きだった。もうしわけないと思いながらも、笑みをこぼす。
「それにね……さっきもいったけど、わたし、やっぱりナノカちゃんがヒーローじゃなくなったとしても、あの城は消えないんじゃないかって思うの」
小亜羅は、空を見上げた。
それほど遠くない空に、依然として浮かぶ城。ちょうど花ノ宮高校の上空だ。
「でももし、あたしのせいだったら……」
「もし、ナノカちゃんのせいでもなんでもなくて、あの城をなんとかできるのが、ナノカちゃんだけだったら？　だって、本当にナノカちゃんのヒーローになるという願いに呼応しているなら、もっと昔、わたしたちが五歳のころから、なくちゃいけないはずでしょう？」
ナノカが目を見開く。その可能性は考えなかったようだ。
「そっか、そうかも」
「それだけじゃなくてね」
小亜羅は、視線を下げる。ちょうど、最後の親子連れが、公園を出ていくところだった。これでここには、ナノカと小亜羅の二人だけだ。
小亜羅は、ナノカがヒーローとなったあの日、現場に居合わせたわけではなかった。しかしナノカから聞いた話は、一生忘れられないだろうと思った。

何度も何度も、想像した。
この公園で、どんなやりとりがあったのか。
「ナノカちゃんがヒーローになりたいと願ったように……だれかが、悪将軍になりたいと願ったという可能性は、ないかしら」
「あ……！」
思わずといった様子で、ナノカが立ち上がった。
「こあらちゃん、頭いい！」
叫んで、それからすわり直す。そんな慌ただしさも懐かしく、小亜羅は思わず微笑んだが、それから首を左右に振った。
「わからないわよ？　あくまで可能性の話だもの。でも、ナノカちゃんがヒーローになったことと、まったくの無関係ってことはないと思うの。どちらも荒唐無稽だし、それにどちらも地域が限定されている。これって、似てるわ」
「うん、うん、本当だね。そっか、そうだった場合、あたしがヒーローじゃなくなっても、悪将軍は残るよね……」
「それどころか、悪将軍の天下になるでしょうね。どうやら、ナノカちゃんを敵視しているようだったから……つまりね、悪将軍を止められるのはナノカちゃんしかいないって、そう思ってるの、わたし」
「ううん……」
唇を前に突き出すようにして、ナノカがうなる。小亜羅は思ったままを告げただけだった。それでもヒーローをやりたくないというのなら、それはもうどうしようもない。あくまで、ナノカの決めることだ。
「じゃあ、ナゾ仮面に、聞きたいよね」
悩んだ末に、ナノカがつぶやいた。
「ナゾ仮面？　それって、十二年前、ナノカちゃんをヒーローにした？」
「そう、それだよ。ナゾ仮面がだれかを悪将軍にしたかもしれないんだったら、ナゾ仮面に聞いたらわかるよね。解決！」

誇らしげに胸を張る。目が光った気すらした。
「そ……それは、そうかもしれないけど……どうやって会うの？」
「呼ぼう！」
一切の迷いなく、ナノカは叫んだ。立ち上がり、拳を握りしめて、希望に満ちあふれた表情で小亜羅を見下ろす。
「最初に会ったのも、この公園だったもん。きっとこの近くに住んでるんだよ！」
「そ……そうかしら」
小亜羅としては、そう言葉を濁すしかない。彼女のこの自信は、いったいどこから来るのだろう。
しかし、ナノカは不安げな小亜羅をよそに、公園の中央まで走り出た。大きく大きく、息を吸い込んでいく。
「ナ……ナノカちゃん？」
空気が動くのが、わかった。
公園の中心に向かって、吸収されていく。巨大な空気の流れが、はっきりと目に見える。それらすべてが、どんどんナノカの肺に入っていく。
「――！」
小亜羅は察した。とっさにきつく両耳を塞ぐ。
「出ーてーこーいー！　ナーゾーかーめーん――！」
とても、人の声とは思えなかった。
びりびりと空気が震える。声の波が肌を撫で、遠ざかっていく。
ナノカの声は、町全体に届いたのではないかと思えるほどだった。家々を越え、長い時間をかけて、遠くへと響きわたっていく。
「ナノカちゃんったら……」
加減というものを知らないのだろうか。知らないのだろう。それがナノカだ。
小亜羅は両手を耳から離した。まだ、耳がびりびりしていた。耳のすぐ内側で、膜が張ったような違和感。鼓膜はだいじょうぶかしらと本気で憂える。

しかし、ナノカの大声は、ただの大声では終わらなかった。
彼女のもくろみ通り、確かな結果を生んだ。
「なんだい、そんな大声で……そんなにこの美しき闇商人に、会いたかったのかな？」
飄々とした声とともに、どこからともなく人影が現れる。
燕尾服に、黒い仮面。
小亜羅は思わず立ち上がった。
「怪しいおじさん！」
ナノカが叫ぶ。仮面の男は両手をあげ、大仰に首を振った。
「はっはっは、お兄さんは美しき闇商人、Ｊ・Ｊだ。まさか忘れたわけではないだろう？」
「じぇいじぇい……？　そんな名前だったっけ？」
仮面の男をからかうつもりも、ましてや怒らせるつもりもないのだろうが、ナノカが当たり前のようにそう問い返す。Ｊ・Ｊはこめかみを押さえ、黙った。
「……まあ、とにかく、今後私を呼ぶときにはもう少し控えめに頼むよ。この近所に住んでいるんでね、そんな大声を出さなくても聞こえる」
「やっぱり！」
ナノカが嬉しそうに両手をぐっと握りしめる。誇らしげに振り返る姿に一瞬くらりと脳が揺れたが、小亜羅はナノカに駆け寄ると、シャツの袖を引いた。あまり近づくなと、仕草で伝える。
「こうやってここに現れたということは……ナノカちゃんに、協力してくれるつもり？」
ナノカとは対照的に、小亜羅は好戦的だ。Ｊ・Ｊは仮面の奥で、おもしろそうに赤い目を細める。
「どうかな。私にできることなら考えるが……私は商人だからね。もちろん、対価を要求するよ」
「悪将軍を生んだのって、おじさんなの？」
「話聞いてたかな、お嬢ちゃん」

さすがの闇商人も、ナノカには手を焼くようだ。小亜羅はとりあえず、ナノカに任せることにする。
「教えてくれるぐらい、いいじゃん」
ナノカは一ミリも引かなかった。かといって、交渉する様子もなかった。ごり押しだ。
「よくないさ。まあ、といっても……私が欲しいのは美味な心。もう、願いを叶えてしまっているからね。これ以上、欲することはできないな」
Ｊ・Ｊがどこかおもしろそうにナノカを見下ろす。ナノカは真剣にうなった。
「じゃ、どうすればいいかな。わかった、おじさんが商人だからいけないんだよ。まずお仕事変えよう！」
「……いやいやいや」
Ｊ・Ｊは腕を組んだ。一度ナノカから視線を外す。
遠くを見て、深呼吸。リフレッシュしたのか、振り返ったときにはポーカーフェイスを復活させていた。
「用がないなら、お兄さん帰るけど」
しかし、心が折れていた。ナノカは頬を膨らませる。
「なんで！　質問に答えてないじゃん！　拳？　拳で語り合う？」
ヒートアップ。小亜羅は心中でナノカを力一杯応援する。ナノカが昔好きだったアニメでは、どんなときでも拳で語り合うのがモットーだった。小亜羅ももちろん、ＤＶＤボックスを持っている。
いけ、ナノカちゃん！
勝てる！
「ちょ、ちょっと待ってもらおうか」
冗談ではないとわかったのだろう、Ｊ・Ｊの声に焦りが現れた。
「私は武闘派ではないんだよ。そもそも、君をヒーローにしたのは私だ。拳で来られたら、ひとたまりもないことは私がだれよりもよく知っている」
「いい残しておきたいことは、それだけ？」

ナノカの拳はすでに燃えていた。
Ｊ・Ｊの表情がこわばる。仮面の下で、筋肉がひきつるのがわかる。
「たとえばの話をしよう、落ち着きたまえ、お嬢さん」
「三、二……」
「いや、だから！　たとえばここで私の命が尽きても、一緒だからね？　なんの解決にもならないからね、わかる？」
ナノカは、拳をおろした。
首をかしげて、そのままうしろを見る。小亜羅はそんなナノカと瞳を合わせ、うなずいた。
「つまり……たとえあなたが亡くなっても、ナノカちゃんはヒーローのままだし――悪将軍も、いなくならない、と？」
さりげなく、悪将軍のことも付け加える。それどころではないのか、Ｊ・Ｊはあっさりとうなずいた。
「そ、そういうことだ。その二つはもう、成された契約だからね。私の意志や、ましてや命とは関係がないんだよ」
Ｊ・Ｊは両手を前へ突き出し、ストップをかける体勢で必死にいう。ナノカと小亜羅が黙ってしまうと、咳払いをして、取り繕うように蝶ネクタイの歪みを直した。
「……わかって、いただけたかな？」
必要以上にダンディに、ポーズを取る。小亜羅がうなずき、ナノカは反対側に首をかしげた。
「なりたい姿にならせてもらったら、それってずっとそのままなの？　それとも……元に戻る、戻す方法が、あるの？」
「では、ヒントを」
Ｊ・Ｊは、すっかり自分のペースを取り戻したようだった。唇の両側を上げて、にやりと笑う。
「対価は、決まっている。それを見つければ、あるいは……」
「それと、おじさんは何者なの？」
「本当に話を聞かない子だね」

Ｊ・Ｊは肩をすくめたが、どこかおもしろがっているようでもあった。笑みの形のまま、口を開く。
「私は美しき闇商人だ。それ以上でも、以下でもない。私が何者かはたいした問題じゃないさ……君たちの力と私とは、もはや無関係なのだからね」
仮面と口とが、浮かび上がったような気がした。
ナノカも小亜羅も、目を奪われる。一瞬、脳が麻痺するような感覚に陥る。
唐突に、まるで二人を呼び戻すかのように、けたたましく着信音が鳴り響いた。ナノカと小亜羅が幼いころに放映された、ヒーローアニメの主題歌だ。前奏からがっつりと、大音量で流れていく。
「ナノカちゃん、お電話が……」
「わわ、はいはいっ！」
ナノカは慌ててスカートのポケットを探る。画面には「お兄ちゃん」の文字が輝いていた。
あの兄か――盗み見て、小亜羅は内心で舌打ちする。せっかく、ナノカとナゾ仮面の対峙という、おいしい場面だったのに。
ナノカが通話ボタンを押し、話し始める。
小亜羅は顔を上げ、そして気づいた。
いつの間にか、Ｊ・Ｊは姿を消していた。

ｓｃｅｎｅ―７　「怪しすぎて逆に怪しい」

羽島万太は、パソコンをチェックしていた。
野中ヒロシと話しているうちに、万太のヒーローマニアぶりもしっかりとばれて、二人は意気投合――というより、どうやらヒロシがある程度万太を認めたようだ。そうして、二人の意見は悪将軍を成敗しようという方向でまとまった。万太は花ノ宮高校の平和のため、ヒロシは妹ナノカの身の安全のため。最終的な目的は違えど、悪将軍をどうにかしなければならないというのは同じだ。
今日一日の学校でのできごとを聞き、協力すると宣言したヒロシの行動は、実に早く、鮮やかだった。目にもとまらぬ早さでキーボードを叩き、「花ノ宮高校・城対策ＨＰ」を開設。城や悪将軍に関して現在わかっている情報を、ナノカのノートと万太の話を元にまとめあげ、さらに掲示板を設置し、ＵＲＬとパスワードを２―Ａ全員にメール送信した。ほかのクラスについては今後どうするか考えていくらしいが、「オレさ、住所とメアドと誕生日押さえてるの、ナノカのクラスメイトだけなんだよね」という理由で、２―Ａだけにとどまっている。なぜそれだけの情報を押さえているのか、それって犯罪なんじゃないだろうかと万太は思ったが、黙っておいた。平和優先だ。
「なんか情報、出てるか？」
フリルエプロンをはためかせ、ヒロシがディスプレイをのぞきこんでくる。どうやら夕飯の準備中らしく、良い香りが漂ってきていた。万太は身を引きながら、うなずく。
「出てますね、掲示板に何件か。やはり家族に話しても信じてもらえなかった、等のものと……あと、興味深いのは、これです」
「どれどれ」
万太がマウスのカーソルで示すと、ヒロシはそれを読み上げた。
「『オレ幽霊見たマジで見た』？」

津田真一の書き込みだった。お調子者ではあるが、嘘をつくようなタイプではない。
「幽霊を見たというのは、今日水無月さんもいっていましたし、こっちにも……」
津田真一への返信という形で、投稿があった。画面をスクロールさせる。今度はクラスでも比較的おとなしい、八代友人の書き込みだ。
「『ぼくも見た。形のないお化けみたいな。気持ち悪い。時間はたぶん四時ぐらい。そっちは何時？』　……で、返信が、『二時ぐらいに学校で』、か」
ヒロシがうなる。万太はその続きを読みながら、幽霊について考えていた。水無月景子が見たといっていたのは、十時ぐらいだっただろうか。これらすべてが嘘ということは、まずないだろう。
「こっちは、家でひとりでいるときに、とありますね。全部で三人です。まだ増える可能性もあるでしょうから……幽霊目撃情報で、新しくスレッドをたてたほうがいいでしょうか」
「いや、それするとガセが増えそうだな。本当に見たヤツは掲示板舐めるように見て食いついてくるだろ、そのまんまでいいよ」
いやに頼もしい。そうですか、と万太は素直にうなずく。パソコンを使うようなことは、万太はあまり慣れていないのだ。せいぜい学校で使う程度といったところで、寮の自室にはもちろんパソコンなどない。
「それにしても、幽霊ねえ。よし、ちょっといじってみるか」
ヒロシがキーボードに手をのばす。万太はイスから立ち上がり、パソコンの前を譲った。
「『髪の長い女の幽霊なら、オレも昔見たことある』」
野中ヒロシとずばりそのままの名で、書き込む。
「本当ですか？」
「本当のこと書く必要ないだろ、ここで」
聞くと、あっさりと返された。まったくそのとおりだ。

ちょうど掲示板を見ていたのだろう、ほどなくしてレスがつく。
『そういうのじゃなくて、どんな見た目かはわかんないんだけど、幽霊だってことはわかる感じ。背筋がぞっとした』
これは八代友人。
『女の霊とかじゃなくて、もっとよくわかんないやつ』
ほとんど同時に、すぐに続いたのは津田真一だ。水無月景子は、いまのところ姿を現す様子がない。
「……要領を得ませんね」
万太はつぶやいた。どんなものかもよくわからないが、幽霊だということはわかるというのは、いったいどういうことなのだろう。
「まあ、無関係じゃないよなあ。城と同じ日に悪将軍、操られた教師と男子生徒。それから、幽霊かあ。やべえ楽しい」
ヒロシは興奮を押さえきれないらしく、浮わついた声でいう。全力でおもしろがっているようだ。
妹は妹でやっかいだと思ったものだが、この兄もまったく違うベクトルでやっかいだった。そういう意味では三ッ山小亜羅も扱いにくい。彼女の周辺には、ちょうど良い、適度な人種はいないのだろうか。
「お、新しい書き込み。タイトル『要チェック生徒手帳』……あ、ナベがやばい！　万太くんバトンタッチ！」
ヒロシは慌ただしく立ち上がり、キッチンへと戻っていく。
ナノカと二人暮らしで、ナノカの担当は洗濯のみ、その他の家事はすべてヒロシが行っているのだという。ナノカが料理をするところというのはどうも想像ができないが、兄ヒロシが主夫のように働く姿にはそれほど違和感がない。料理の腕もあるのだろう。あの兄ならば妹のために努力を惜しまなそうだし、裏付けるかのように空腹を刺激する香りはどんどん強くなっていく。
万太は腹を押さえた。己の欲望を振り払うかのように首を振り、パソコンの前にすわり直すと、ヒロシのいった書き込みをチェックする。

「……え？」
そして、眉をひそめた。
二度、じっくりと読む。すぐに胸ポケットから、生徒手帳を取り出した。ぱらぱらと開いて、気づく。
挟み込まれた、小さな白い紙。自分で入れた覚えはない。
紙には、印字された文字で、こう書かれていた。
『どんな敵にも打ち勝つと信じている――この合図で、クラスの女子に襲いかかること』
まるで、指示書のようだった。
万太はパソコンを見る。そこにある文面とまったく同じだ。書き込んだのは吉本猛。生徒手帳から出てきた、とある。
すぐに何人かの男子生徒が、自分の生徒手帳にも同じものが、と書き込んでいった。万太も一応、右にならっておく。
まだ数人ではあったが、予感があった。おそらく、２―Ａの男子生徒、全員だろう。
二人の女子が、自分の生徒手帳には何も挟まっていない、と書き込んでいる。女子はあのとき操られる様子はなかったので、当然だ。
「つまり、この指示書によって、操られた……」
そう考えるのが自然だった。
しかし、だとすると――いったい誰が、いつの間に。
ほとんど、悩むことはなかった。
すぐに、思いつく人物がいた。
掲示板にも次々と、その可能性を指摘する書き込みが続いていく。
「生徒手帳、なんだって？」
料理が落ち着いたのか、ヒロシが顔を出す。万太は白い紙を差し出した。
「これが、生徒手帳に挟まっていました。おそらく、２―Ａの男子全員に。書き込みによると、今日欠席した男子生徒の生徒手帳にも、同じものがあったようです」
「ほーう」

ヒロシはミトンをはずし、紙を受け取る。
「ということは、悪将軍は紙切れによって人を操ることができる、か。やべえ強え」
敵が人を操ることができるというのは、わかっていることだった。事実万太は、操られたのだ。
「ですが、目に見えない不思議な力ではないということがわかったのは、大きいでしょう。少なくとも何者かに接触され、これを忍ばされなければ、操られることはないということです。たとえば同じ空間にいるだけでいつの間にか操られてしまうというのであれば、お手上げですが」
「おお、そうだよな。賢いな万太くん。そして前向きだな万太くん。だが妹はやらん！」
この兄は、二言目にはすぐこれだ。万太はすでに反応するのも億劫で、黙ってスルーする。
「それで、それを忍ばせた犯人に、心当たりは……」
ヒロシはディスプレイに目をやり、興味深そうに鼻を鳴らした。それから、万太を見る。彼がなにをいいたいのか、万太にはわかった。
万太は、うなずく。
「先日……先週の木曜日、生徒手帳が集められたのはたしかです。生徒手帳の大幅な仕様変更を検討していて、現在どの程度活用されているか調べたいからと。プライベートなことが書かれている場合には応じなくて良いとのことでしたが、数名の女子生徒をのぞいて、ほとんど全員が提出していました。返却されたのは、その翌日です」
その時点では、美少女ヒーローも空に浮かぶ城も存在しなかったので、まったく深く考えなかった。たとえばそれが今日だったのなら、不審に思ったかもしれないが。
「集めたのは、もちろん……」
「ええ、担任の竹ノ内先生です。生徒手帳改訂の担当になってしまったのだと、雑談混じりにいっていました」

「怪しいなあ。怪しすぎて逆に怪しい。オレも高校生だったらなあ」
ヒロシがうきうきとした様子でいう。当事者として参加したくてたまらないらしい。
しかし万太にいわせれば、ヒロシは十分に当事者だった。実際に城を目撃し、こうしてＨＰを開設して積極的に事態を解決せんとしている。そして、おそらくは一連の出来事の中心に近いところにいるであろう、野中ナノカの兄なのだ。
「そしたらナノカちゃんのクラスメイトになれちゃってこれはもうたまらんな！」
そっちか。万太は首を振った。
「花高の寮ならパソコンもないだろ。もうちょっと残って、ついでに夕飯も食べていけばいいさ。ナノカもそろそろ帰ってくるしな」
さらりとそういって、ヒロシが食器棚から皿を出し始める。さすがに甘えるわけにはいかないと、万太は遠慮の言葉を口にしようとしたが、漂う香りが決意を鈍らせた。
「ええと、それでは……掲示板も、気になることですし」　いやそうなんだけどそうではなくて――しかしどうも、素直に礼が出てこない。口の中でもにょもにょと理屈をこねる。
それでもここはしっかり礼を伝えなければ――そう思った瞬間に、ドアが開いた。
「ただいま！　帰ったよー！」
明るい声の、ナノカだ。ヒロシが電話した際、もうだいじょうぶみたいだとはいっていたものの、やっと万太はほっとした。幼なじみであるという二人がケンカしていたのでは、あまり良い気分がしない。
「お帰り、ナノカ――！　小亜羅ちゃんは、帰ったのか？　お、なんだそれ、『ゴーストやっつけちゃーズ』ＤＶＤボックスじゃないか！　どうしたんだそれ！」
「別れ際にね、こあらちゃんが貸してくれたの。これ見て元気出してねって。限定版なんだってさ」

「すごいじゃないか！　お兄ちゃんも見たいぞ！　今夜は徹夜だな、ナノカ！」
「ゴーストとは」
「拳で」
「「語り合え！」」
ナノカとヒロシが、拳をあわせて叫ぶ。
『ゴーストやっつけちゃーズ』とは、十年以上前にはやった子ども向けアニメだ。ＤＶＤボックスは、期間限定通信販売のみの登場で、声優陣のコメントを収録したブックレットやヒロインのフィギュアまで同梱された豪華仕様、やたらめったら高かったのを覚えている。万太も欲しかったが手が出るはずもない。
「ぼ、僕も……」
見たいですという雰囲気では、なんとなくなかった。万太は咳払いをする。
「あれ、万太くんだ。まだいたの？」
純粋に不思議そうに、ナノカが聞いてくる。そういわれてしまえばかすかに傷ついた。というより直球で失礼だ。
「いてはいけませんか。調べていたんですよ、いろいろ。お兄さんにも協力してもらってね。収穫もありましたよ」
「あ、こっちもすごいよ！　ナゾ仮面に会っちゃったよ！　えっとね、悪将軍っていうのはあたしみたいに、だれかが願いを叶えてもらってなったみたいだよ」
まるで、帰りにお魚が安くなってたから買ってきちゃった、とでもいうかのようなテンションで、ナノカが重要な情報を口にした。
とっさには反応できず、万太は黙る。
いま、なんと、いったのだろう。
「ナゾ仮面……に、会った？　どうやって、ですか？」
「呼んだんだよ、大声で」
「呼んだ？」
ますます混乱する。万太はメガネをはずした。深呼吸をして、か

け直す。
「……詳しく、教えていただけませんか？」
ナノカは腕を組んだ。顎を上げて、見下ろす。
「ふふん。知りたかったら、そっちの情報も教えることね」
「なんで悪役みたいなんですか。いいですよ、もちろん」
「じゃ、食べながらだな」
いつの間にか、食卓には三人分の料理が並んでいた。鶏肉のソテーマスタードソースがけと、サラダにスープ。多めに用意していたのか、しっかり人数分の肉がある。
「いやあ、ナノカが友達連れてくるかもって思ったから、五人分ぐらい食材買っちゃってさ」
五人。万太は呆れつつも感心し、頭を下げる。
「では、お言葉に甘えます。すみません、ごちそうになってしまって」
「いいってことよ。ヒーロー好きに悪いやつはいないからな！　妹はやらんけどな！」
悪い人間ではないのだろう。ただ変態なだけだ。
ナノカはとっくに手を洗ってきたようだった。イスにすわり、待ちきれないというように足をぶらぶらさせている。見事になにもする様子がない。対照的に、ヒロシはいそいそと麦茶をコップに注いだり、取り皿を出したりと、大忙しだ。
「では食事をいただきながら……話しましょう。お互いに。あと、ナノカさんの、心についても」
ちょっとかっこよくいったが、二人はあまり聞いていないようだった。マヨネーズ出して、あ万太くんはドレッシングかな、などとナノカは指示を出すのに忙しい。
「それでは、いただきます！」
「いっただきまーす！」
「……いただきます」
この二人は、本当に事態をどうにかする気があるのだろうか――

漠然とした不安を抱きながらも、万太もとりあえず、食事に専念することにした。

scene_8　「ヒーローって、なんだ」

ナノカの頭はパンクしそうだった。
昨夜は結局二時間しか寝ていない。一話だけといって『ゴーストやっつけちゃーズ』を見始め、おもしろいからあと一話だけ、気になるからもう一話だけ……明け方にナノカは寝てしまったが、ヒロシと、帰るタイミングを失ったらしい万太は、寝ずに見続けていたようだ。頭の中では懐かしのやっつけちゃーズのストーリーと、万太にいわれた今後の計画とがぐるぐるとまわっていた。要するにごちゃごちゃになっていた。
「あたしがやるべきことは……ゴーストをやっつける、だよね」
重たい瞼をどうにか上げて、歩きながらナノカがいう。少し前までは寒い日が続き、昨日はちょうど良い暖かさだったが、今日はどういうわけか暑いほどだ。五月の気候は難しい。余計に頭がくらくらした。
その隣で、寝ていないはずなのに背筋を伸ばし、まるで不調を感じさせない万太が、きっぱりといった。
「ちがいます。まずは竹ノ内先生の様子を探る……のは、あなたには無理そうなので僕がやりますが、あなたは悪将軍がだれであれ、敵を倒すことを第一としてください。昨日、向こうがわざわざいったぐらいですから、相手側の狙いはそこなんでしょう。どう転ぶかは別にしてね」
「うーん」
敵、敵……ナノカは昨日の話を必死で思い出した。
竹ノ内が黒幕である可能性があるのだというが、昨日の彼はどう見ても操られていたし、目を覚ましたときには記憶がないといっていた。それが演技だということもあるだろうが……どうにも、釈然としない。
ヒーローなら悪将軍をやっつけてくれる――なぜ竹ノ内は、そん

なことをいったのだろうか。竹ノ内が悪将軍本人ではなく、操られていたのだとしても、あの言葉が悪将軍のものであることはまちがいないだろう。挑発か、それともほかに、狙いがあるのか。

もしくは、「ヒーロー」「悪将軍」のほかになにかが……考え始めるときりがない。

「それと、心です。昨夜話したとおり、あなたがヒーローとしての力を手に入れた代わりになんらかの心を失っているのはまちがいないでしょう。ヒーローをやめたいのならばそれを見つけだすことが最優先事項でしたが、そうでなくても逆の意味で、やはりわかっておいたほうがいい。これまでの十二年間を思い出して、考えておいてください」

万太は、メモ用紙を渡してくる。ものすごく受け取りたくなかったが、仕方なくナノカは手を伸ばした。『キリリ天使ミラルンパ』とロゴの入ったピンク色のメモ用紙だ。ヒロシのものを使ったのだろう。

「えーと……良心、慢心、猜疑心、関心、感心、歓心、出来心、邪心、無心、無関心、苦心、細心、愉快、痛快、鬱々、迷い、後悔、悩み……」

「喜怒哀楽、といった大きなものではないでしょうからね。細かいところで思いつくものを、いくつかピックアップしておきました。最初は『心』のつく言葉を考えていたのですが、そうとも限らないでしょうから。まだまだ、あると思います」

「へえー」

ナノカは心から感心した。いったいいつのまに。ずっといっしょにＤＶＤを見ていたと思ったが――実際、ヒロシとともにやっつけちゃーズ談義に花を咲かせているようだったが――彼はしっかりと働いていたようだ。

それに比べて、自分は。

食べてシャワーを浴びてアニメを見て、ただ寝て、そしてまだ眠い。

「万太くんは、偉いねえ」
「な、なんですか。当然でしょう」
万太がメガネを直す。ナノカは首を振った。
「偉いよ。なかなかできないよ。かっこいいと思う」
「か……っ」
万太が立ち止まった。
つられて、ナノカも止まる。時間が止まったような、沈黙。
腕時計に目をやった。まだ余裕だが、止まるほどではない。
「どうしたの？」
顔を寄せると、磁石が反発するように、その分ぴったり遠ざかる。
「……あ、あなたにはいっておかなければならないことが、二つ、あります」
「うん、歩きながらでいいかな」
「もちろんです」
万太はゴホンと咳払いをする。しかし動く様子がないので、ナノカは歩き始めてみた。そうすると、一定の距離を保ち、隣に並ぶ。
「まず、昨日の朝のことですが……転入生の話は聞いていたのですが、まだ制服が行き渡っていないという話だったので、そうとは気づかず、対応が不親切なものになってしまいました。謝るタイミングを逃してしまって、一日過ぎてしまいましたが。もうしわけありませんでした」
淡々と、万太は謝罪を口にした。
ナノカはまばたきをする。
そういえば、門が閉められていた。そんなこともあったなあと、まるで遠い昔のことのように思い出す。
「いいよ、もう。勘違いなんでしょ。それにこの制服、お兄ちゃんが裏ルートで入手したらしいんだよね。初日から着たいだろうって。だから、学校で注文したのはまだもらってないんだよ」
「裏ルート……」
つぶやくが、深くは聞いてこない。その気持ちはナノカにもよく

わかった。
　裏ルートという言葉を聞いたときには心からつっこみたかったが、やめたのだ。だって聞くのなんか怖い。
「それで、もう一つは？」
　万太は二つといっていた。軽い気持ちで尋ねると、もう一度立ち止まってしまう。
　しかし今度はすぐに、歩き出した。斜め四十五度に顔を上げ、ナノカのいない方向に微妙に視線を避けている。
「その……昨日から、思っていましたが。あなたの言動は、あまりにも、誤解を招きます。それに昨夜、寝るときですが、ぼ、僕の膝に頭を……ゴホン、いやそれはまあ、意識がなかったのだと思いますが……とにかく、もっと警戒心を持って……――あ、警戒心？　それが正解なんでしょうか。だとすると、警戒心を持ったらヒーローではなくなってしまう……いや、待て、そういうことなら、足りない心はまだまだありそうですね……」
「なにぶつぶついってるの。ほとんど聞こえないんだけど。あたしだって、警戒ぐらいするよ！　警戒！」
　ほらね、とナノカはファイティングポーズをとってみせる。ナノカの思う警戒心の表れだ。
　しかし万太は、それをごく冷淡な目で見た。
「そうですか」
　まるで伝わっていない。
　ナノカはため息を吐きだした。自分には足りない心があるといわれても、まるでピンとこないのだ。
　それに、どこか哀しい、寂しいような気持ちもある。
　まるで、欠陥品だといわれているような……――
　とか考えるのは、実は一瞬だった。なぜならナノカは、この十二年間、とくに困ったこともなかったし不満もなかった。つまり欠けている心というものにまったく心当たりがない。まあいいかと楽観的に捉えている。

考えてもよくわからないことは、考えない。
とりあえず、進む。
それがナノカの信条だ。
「ねえ、『変態』っていうのも、心の種類かなあ」
ちらりとうしろのほうに目をやって、聞いてみる。万太は一瞬考えたようだった。
「……どうでしょうね。まあ、そんなような気もしますが」
「お兄ちゃん、ナゾ仮面に願い叶えてもらってさ、変態の心なくしちゃったらいいのに」
「すぐに取り戻しそうですけどね」
たしかに、叶った願いは一瞬でなかったことになりそうだ。ナノカは眉根を寄せる。
隠れているつもりなのかもしれないが、気づいていた。ビデオカメラを構えたヒロシが、しっかりとついてきているのだ。録画してどうするつもりなのだろう。
「まあ、さすがに仕事があるでしょうから、ずっとではないでしょう。そういえばお兄さんは、なんのお仕事を？　いえ、ただの興味ですが」
「大学の研究員だよ。時間の融通が利くんだってさ」
ヒロシが白衣を着ている姿はなかなかさまになっていると思うが、白衣を着てにやにや笑ってビデオカメラを構えている様子は怪しいことこのうえない。
だってお兄ちゃんはナノカが大好きなんだ！
と熱く語られても引くだけだ。
ナノカももちろん兄が大好きだったし、愛されているのは嬉しくもあったが、ときどき、ああ本当に変態なんだなあと思うことがある。その矛先が第三者に向いて迷惑をかけるよりは良いと思うことにする。
「振り切るというわけではありませんが、もう少し急ぎましょうか。まだだいじょうぶですが、二十分には校門を閉めなければなりませ

んし」
「閉めるんだ」
そこは譲れないようだ。ちゃんと気をつけなきゃと、ナノカは頭のなかの情報を改めて書き換える。学校は八時二十分までに行くこと。
不意に、カバンに引っかけたケースのなかで、携帯電話がぶるぶると震えた。歩きながら、ナノカはゆっくりケータイを引き出す。
メールかと思ったのだが、そうではなかった。三ッ山小亜羅と名前が出ている。慌てて通話ボタンを押すと、小亜羅の声が飛び込んできた。
「ナノカちゃん！　大変なことになってるの！」
ひどく取り乱した声だ。声のうしろから、叫び声まで聞こえてくる。窓の割れる音や、なにかがぶつかるような音。
ナノカはさっと血の気が引いた。昨日、女子生徒たちに襲いかかった男子生徒たちの姿が、頭に浮かんだ。またあんなことが――いや、おそらく、それ以上のことが。
「学校ですね？」
万太の問いに、はっとする。
「こあらちゃん、そこ、学校だよね？　どうなってるの？　あたし、いますぐ……」
「来るな」
応えたのは、小亜羅の声ではなかった。低い男の声だ。
「……だれ？」
「来なくていい、野中さんは帰るんだ。今日は家から一歩も出るな。わかったな」
その声には、覚えがあった。
「竹ノ内先生？」
ブツリと、通話が切られてしまう。無機質な音が続く。
ナノカは慌ててかけ直そうとして、思い直した。行ったほうが早い。来るなといわれておとなしく帰るわけにはいかない。

「あたし、行くから！」
「ちょ……っ」
万太がなにかをいおうとしたが、悠長に聞いている場合ではなかった。ナノカは地面を蹴って、勢いよく走り出す。
学校でなにが起きているというのだろう。
気が気ではなかった。
昨日、あんなことがあったばかりなのに、家でもその対策を皆で考えていたのに――といってもナノカはほとんど一方的に指示されただけだが――それでも、現実味が薄れていた。
家のなかは平和で安全で、危機感はどこか遠い出来事のことのように、消えそうになってしまっていた。
現実なのだ。
悪将軍という敵がたしかにいて、ナノカはヒーローなのだ。
立ち向かって行かなくては、ならないのに。
「許せない……！」
情けないという気持ちよりも、怒りが勝った。風を切り、車をも追い抜いて、疾走していく。
花ノ宮高校は、すぐに見えてきた。門まで回り込むつもりもなく、走り込んでそのまま塀を跳び越える。学校にたどり着くまでは、制服姿の生徒たちを何人か見たのだが、敷地内ではどういうわけか誰にも会わなかった。適当な昇降口でスニーカーを脱ぎ捨てて、校舎に入る。
いやに、しんとしていた。
全力で走ってきたナノカはすでに汗だくだったが、校舎内はひやりとしていて、汗が一気に冷えていった。上靴を履いていない足の裏は冷たく、嫌な予感と共に冷気が身体を浸食していく。
電話で聞こえてきたような物音も、叫び声も、ない。
ナノカは、階段を駆け上がった。とりあえずは2―Aに、小亜羅や竹ノ内に会わなければと思った。
途中とおりすぎる教室を覗くが、だれもいない。生徒は愚か、教

師も。カバンや教科書が散乱し、乱れた机やイス、割れた窓が、確実になにかがあったのだと伝えている。
「どういうこと……」
鼓動がどんどん早くなる。手遅れ、という言葉が脳裏に浮かんだ。
小亜羅やほかのみんなは、無事なのだろうか。
もしかしたらどこかへ、連れて行かれてしまったのだろうか。
「――っ！」
突然、背後から羽交い締めにされた。ナノカはとっさに腕を捻り上げて、身をよじって飛び退く。
お面をつけた男だった。縁日で売っているような、アニメのお面だ。男は痛がるそぶりもなく、すぐに体勢を立て直してくる。
着ているのは、背広だ。
「先生……？」
おそらく、そうなのだろう。転校したばかりのナノカには、だれなのかまではわからない。少なくとも、竹ノ内ではないことはたしかだ。
「操られてる……のかな。いまは、悪将軍の手下ってことだよね」
両手を構える。やっつけてしまっていいものだろうか。ヒロシと万太が、悪将軍は指示書を持たせることによってひとを操るらしいといっていた。ということは、どこかに紙が貼り付けられているか……内ポケットにでも入っていたらお手上げだ。
しかし、そんなことを考えている場合ではなさそうだった。
前方からも後方からも、ゆらゆらとひとが集まってきていた。全員が背広かジャージか、女性の姿もある。制服のものはひとりもおらず、例外なくお面を身に付けている。
ぞっとした。
なんというセンス。
「悪いけどあたし……手加減しないからね」
しかし、人数が多い。しかも全員が大人だ。
大勢対一人、すぐに飛びかかっていかないといけない。ナノカは

足に力を込める。
「野中！」
どなりつけるような声が、響いた。
お面の教師たちの間を縫って、走り込んできたのは竹ノ内だった。野中さんと昨日までは穏やかに名前を呼んでいた彼は、いまは鬼気迫る様子で、まったく余裕がない。ナノカの手をつかみ、そのまま走る。
「先生？」
「どうして来た、家にいろといっただろう！」
力一杯怒鳴られて、ナノカは身を小さくする。どうしてそんなに怒られているのか、わからない。
「だってあたし、どうしても気になって！　みんなはどうしちゃったの、こあらちゃんは？」
「風に攫われた。おそらく、あの城にいる。あのお面は全員教師だ。暴力を振るうんじゃないぞ」
ナノカはとっさに叫び返そうとするが、なにをいえばいいのかわからなくなる。小亜羅が城にいる。小亜羅だけではない、おそらくは、この時間までに登校してきていた全員がということなのだろう。
竹ノ内に手を引かれるままに、階段を駆け下りる。お面の教師たちは追ってきていたが、走ってくる様子はない。
「ここから出ろ。逃げるんだ」
竹ノ内の言葉の意味が、ナノカにはわからなかった。
「どうしてですか！　だってあたしが、悪将軍を倒さないと……！」
「おまえは女の子だろう！」
泣きそうなほどに感情のこもった、声だった。
ナノカはますます混乱する。
女の子だ。そんなことはあたりまえだ。
それが、どうしたというのか。
「戦うとかそんな物騒なことは、先生に任せとけ。ただでさえ昨日は……悪いこととしてしまったみたいだしな。いいか、走って帰って、

家に閉じこもっているんだ」
「だって先生は、ヒーローでもなんでもないのに……！」
「ヒーローって、なんだ」
いつの間にか、外に出ていた。
靴はない。しかしそんなことを、気にしているときではない。
正門の向こう側で、あとから来たであろう生徒たちがこちらをのぞき込んでいる。門は閉められていた。万太が立っている。なにかがあったことを察知し、なかに入れないようにしているのだろう。
さすがだなと頭の片隅で思う。
「野中。ヒーローっていうのは、なんだ。力のあるやつのことか。すごく強いやつのことか。変身したり必殺技が使えたり、そういうやつのことか」
「あ、あたしは……」
答えられなかった。
竹ノ内のいおうとしていることが、わかってしまった。ナノカは首を振る。そんなことを気づかせないで欲しかった。
「あたしは……――」
「先生だって、ヒーローだ。だから、任せとけ」
竹ノ内が、笑う。
その背後で、風が舞った。
「先生！」
ナノカがとっさに飛び出そうとする。しかし風のほうが早かった。まるで意志を持っているかのように渦を巻き、飛びかかってくる。
竹ノ内が、ナノカを突き飛ばした。
ナノカがよろめく。その瞬間に、風が竹ノ内を捉える。
叫び声も、聞こえなかった。
風があっというまに竹ノ内を包み込み、上昇する。それは、空の城へ。まるでそうなることが決まっていたかのように、真っ直ぐ伸びて、消えていく。
静寂が、残った。

ナノカは膝をつき、拳を握りしめた。

scene_9　「絶対に、来てくれる」

三ッ山小亜羅は、両手を握りしめていた。汗が滲む。
ここが空に浮かぶ城の内部だということは、疑いようがなかった。花ノ宮高校の生徒たち――全員ではないようだが、それでも半数はいるだろう――と、数人の教師たちが、あっというまに連れてこられたのだ。風に攫われた、としかいいようがない。
だだっ広い、舞踏場のような部屋だった。いかにも高級そうな赤絨毯が敷き詰められ、高い天井からはシャンデリアがぶら下がっている。そこに灯りはついていなかったが、無数にある窓から、充分な光が差し込んできていた。一番大きな窓の前ではいまでも風が渦を巻いているが、入ってくる様子はない。
反対の壁には、壁かけランプのようなものがいくつか引っかけられている。アンティークを思わせるレトロな風合いは、こんな状況でなければ見とれてしまいそうなほどに美しい。
「落ち着くんだ。怪我をしているやつはいるか？」
一番最後に飛び込んできた竹ノ内が、率先して声をかけている。ほかに教師は全部で五人程度だろうか。
小亜羅は竹ノ内に駆け寄った。どうしても、ナノカのことが気になっていた。
「竹ノ内先生。あの……ナノカちゃんは、来ていましたか」
竹ノ内の表情が、かすかに曇った。
「ああ……無事だといいがな。情けない話だが、操られた先生たちが彼女に襲いかかっていてね。自分もそうなるところだったが、なにかの拍子にお面がはずれて、我に返ったんだ。ここにいる先生たちも、そうだろうな」
だから、一緒にここに連れてこられたのだろうと、ため息をつく。
小亜羅は胸を撫で下ろした。
「よかった。ナノカちゃんさえ無事なら、助けに来てくれるもの」

「三ッ山」
竹ノ内の声は厳しく、硬い。小亜羅は眉根を寄せた。
「なんでしょう、先生」
「野中に背負わせるな。あいつだって、普通の高校二年生で、おまえの友だちなんだろう」
「ナノカちゃんは普通じゃないわ。特別です。だから絶対に、来てくれる」
きっぱりといいきる。不快だった。なにをいっているのかわからない。
ナノカはいつだって特別だ。小亜羅にとってのナノカは、いつだってヒーローだった。今回だって必ず、どんな状況だろうと、来てくれる。
小亜羅は自分が、囚われの姫になったなどとは思っていなかった。だが、彼女が助けに来てくれるのを待つというのは、とても素晴らしいことだった。ある意味では夢のような状況といえるかもしれない。
だがナノカは、きっといまごろ、心配している。
「かわいそうな、ナノカちゃん」
「おまえ……」
竹ノ内が、なにかをいいかける。しかしそれを聞かずに、小亜羅は彼に背を向けた。
「みんな、この部屋を出てみましょう。危険かもしれないけど、ここでこれだけ騒いでいても平気なんだもの、きっとだいじょうぶよ。お水や食料が、あるかもしれないわ」
顔なじみを中心に、声をかけていく。彼らは突然の状況にただ戸惑っていたようだったが、小亜羅の提案に顔を見合わせた。
「そうだね……じゃあ、男子、探検に行きなよ」
「いや、ここは先生たちでいこう」
「オレたちも行くって！」
我こそはと、手が上がり始める。

小亜羅は微笑んだ。
だいじょうぶ、ここはだいじょうぶだ。
ナノカは来てくれる。信じて、待っていればいい。それだけのことだ。
「ねえ……あたしたち、帰れるのかな」
だれかがぽつりと、つぶやいた。
ナノカちゃんが来てくれるわ――小亜羅は真っ先に、口にしようとする。しかし、ほかの2―Aの生徒たちが、声をあげた。
「うちのクラスの転入生、ヒーローなんだぜ。昨日校門持ち上げたの、見ただろ」
「来てくれるよ、だいじょうぶ」
「昨日だって、助けてくれたんだよ」
口々に、ナノカの名を出す。ほかのクラスの面々も、もちろんナノカのことは知っているのだろう。不安は少しずつ、希望に変わっていった。
暗く重くのしかかるものが、なくなるわけではない。それでも。
この町には、ヒーローがいる。
「ケータイつながるよ！　HPにこっちの情報書き込んどこう」
「親にも電話しといたほうがいいかな。ちょっと遅くなる心配するなマルみたいな」
「なにそれカッケー」
「いや意味わからん」
口ぶりが、だんだんと明るくなっていくのがわかった。小亜羅は心底からほっとする。だいじょうぶ、絶対だいじょうぶ――もういちど、心にいいきかせる。
小亜羅は知っている。ナノカが助けに来てくれるのだと。だからだいじょうぶなのだと。
それをどう伝えたものか、どうすればわかってもらえるのか――それが問題だった。しかし、杞憂だったようだ。
彼らはちゃんと、わかっていた。

小亜羅には、それが嬉しくてたまらない。
「トイレとシャワーと食料発見！　敵なし！」
「大量のベッドも発見！　敵なし！」
「とりあえず水だ。ふつうにコンビニで見るやつで、未開封。オレも飲んだが問題ないだろう」
体育教師と、男子生徒数人が、早くも戻ってくる。その大声は広間中に響き渡り、生徒たちは歓声をあげた。
これといって喉が渇いていたわけでもないだろうが、運ばれた水のまわりにあっというまに人垣ができる。小亜羅は遠慮するように、その場から離れた。
壁にもたれかかって、息をつく。
そっと、携帯電話を取り出した。野中ナノカの名前を押そうとして、その前にＨＰへ繋げる。ヒロシの立ち上げた、２―Ａの生徒が情報を自由に書き込める掲示板を開いた。
たったいま書かれたらしい、城の内部に関するものが数件。さかのぼっていくと、幽霊についての情報が、新しく書き込まれていた。

真下ゆな――幽霊を見たような気がする。
近藤卓――オレも見た、超怖い。
小亜羅はブラウザを閉じた。カチカチと、文字を打つ。
『こっちはだいじょうぶ。待ってるわ、ナノカちゃん』
ナノカの携帯電話に、そうメッセージを送信した。

scene_10　「やめてしまえばいい」

「……ありがとう、ございました」
羽島万太は、ヒロシにビデオカメラを返した。何度も見る必要はなかった。
ナノカが走って先に行ってしまい、あとを追った万太は、正門から見ていたのだ。追いついてきたヒロシのビデオカメラにも、確かに映っていた。
竹ノ内が、風に包まれて、城に連れて行かれた。
なにか得体の知れない、超自然的な力――たとえば、魔法、といえばいいのだろうか。紙によって操られるとか、お面をつけた教師が襲ってくるとか、そういう次元ではなかった。
抗いようがない。
ではなぜ、ナノカは無事だったのだろう。お面が外れて正気を取り戻した教師たちも、門の外から見守っていた万太やヒロシ、ほかの生徒たちも、どうして除外されたのだろう。
「いや……」
万太はメガネを押さえた。
ちがう。自分たちが無事だったことは、おそらくたいした問題ではない。
問題は、あの場にいた「ヒーロー」が連れて行かれなかったという事実だ。
「おまえの仲間たちは預かった！　返して欲しくば、城へ来い！
はーっはっはっはっはっは！」
ヒロシが首もとで結んだ毛布をマントのようにはためかせる。悪将軍シミュレーション中らしいが、そのセンスはいまいち理解できない。
だが、いわんとしていることは、なんとなくわかるような気がした。

ヒロシも万太と同じように、悪将軍の狙いを考えていたのだろう。結論を急いでもしようがないが、いまのところ、舞台を整えてナノカが来るのを待っていると考えるのが自然だ。

竹ノ内が風に攫われたのち、教師たちの顔に張り付いていたお面は自然にはがれ落ちた。お面には『野中ナノカを襲うこと』といった指示が書かれており、そのせいで操られていたようだ。彼らは正気に戻り、ほとんどその場で結論がくだされた。しばらくの間は、休校にするしかないと。

当然の判断だ。あまりにも危険だった。またいつ、あの風が襲ってくるかわからないのだ。

「うーん。どんどん書き込まれてくぞ。城はけっこう快適な状況らしい。山のような保存食はぜんぶ高級品だってよ」

先程から頻繁にパソコンの更新ボタンを押して、ヒロシはＨＰをチェックしていた。同時に悪将軍のマネをして、その合間に昼食の準備をして――なかなか忙しそうだが、とりあえず仕事に行く気はないらしい。

「……ナノカさんは……」

聞いてもしようがないことはわかっていたが、口にしてしまう。それはほとんどつぶやきだった。

ここは、ナノカの家だ。うなだれるナノカをヒロシが抱え、おまえも来いというのでそのまま野中家に戻って来たのだった。ナノカは黙って自室にこもり、出てくる様子がない。

「まあ、無理だろうな。ナノカはヒーローなみのスペックはあっても、か弱くてかわいくてかわいい女の子だぞ。ショックでかいだろ」

なぜかわいいを二回いったのか。しかしつっこんでいる場合ではない。

「僕たちで、どうにかすることはできないでしょうか。たとえば……奥の手ではありますが、Ｊ・Ｊを見つけてヒーローとか魔法使いとか、なにかそういうものにならせてもらう、とか……」

「うーん。リスク高いだろ。それにナノカだって、向こうが本気で

来てたらどうなってたか。だからたぶん、そういう問題じゃないんだよ。明らかに、ナノカを誘ってる」
「そうですね……」
万太は、今日何度目になるかわからない、深い深いため息をはき出す。
ヒロシのいうとおりなのだ。
ひとを操るだけではなく、風までも自在に扱うことができるらしい――そうなれば、真っ向から戦ったときに、ナノカの勝ち目は薄い。
悪将軍の目的はわからないが、いままでのできごとはすべて、ナノカを標的としていることを物語っていた。
「悪将軍は……ナノカさんに倒されたい、のでしょうか？」
「または、ばっちりそれらしいステージをお膳立てして、戦いたい、とかな。まー、あれだ、小亜羅ちゃんが攫われたいま、あいつに一番近いのはオレと、一応万太くんもだろ。用心しなきゃな」
「え」
万太は眉根を寄せた。
近い、だろうか。
いまもこうして彼女の家にいるわけだから、物理的にはたしかに近い。が。
だからといって狙われるほどとは思えない。
「そうなると、一番危険なのは、お兄さんですね」
思ったままに正直に、心配の意味合いを込めていう。ヒロシはくしゃくしゃと頭を掻いて、頬を染めた。
「っだろー？　この展開、さらにオレがやられるとか攫われるとかなったら、ナノカ的には大ダメージでお膳立て完璧だろー？　いやあ、愛される兄ってのは、つらいよなあ」
「……いや、どうでしょう」
ごにょごにょと、口の中でつぶやくにとどめておく。なぜそんなに嬉しいのだろうか。

「でもナノカなら、だいじょうぶだ」
ふと真面目な声で、ヒロシがいった。その目は、閉ざされたナノカの部屋を見ていた。
そうだろうかと、万太は思う。いまだって呼んでも返事をしないほどにふさぎ込んでいるというのに、この上ヒロシの身にまで危険が及んだら、どうなってしまうのだろう。
変態だとはいいつつも、ナノカがヒロシのことを信頼し、懐いているのは見ていてわかる。ナノカのことをだれよりも愛し、だれよりも考えているのは、この兄にちがいないのだ。たとえ重度の変態であっても。
「というわけで万太くん、オレはナノカのためにコレッキヨのまんじゅうを買ってくる！　ナノカを任せたぜ！」
その提案に、万太は電撃が走るような感覚を受けた。
「いや、え、このタイミングで、ですか？」
「行く！　ナノカは昔から、あそこのまんじゅうが大好きなんだ。食べれば元気になるさ」
「し、しかし」
ものすごく嫌な予感がした。この流れ。なにかのフラグが立っているとしか思えない。
「やめといたほうが……」
「いいんだよ」
なにがいいのか、ヒロシは親指を立てる。
じゃあなといい捨てて、フリルエプロンをしたまま、エコバッグに長財布を突っ込んで出て行ってしまった。まるで風のよう、あっというまだ。
悲鳴でも聞こえてきたらどうしようかと、万太は思わず耳をすます。しかし、そういったものは聞こえてこない。
もう一度、ため息をついた。
正直なところ、いまのナノカを任されても、困るのだ。
どうすればいいのか、わからない。

「……できることを、やらなくては」
決意表明のようにつぶやいて、パソコンに向かう。事細かに城の内部の様子が記されていくが、やはり敵の姿はないらしい。施設も完璧、まるで高級ホテルのようだという書き込みまで去る。さすがに、電気機器の類はないらしいが。
そのなかでも、やはり、幽霊の目撃情報は続いていた。城へ連れ去られた人物からひとり、連れ攫われず自宅にいる人物からも、ひとり。
「場所が要因というわけではないのか……」
万太はスクールバッグのポケットから、ボールペンを取り出す。ヒロシから自由に使っていいといわれている、パソコンデスク上のメモ帳を一枚はがした。
幽霊に関するところを、まとめ直そうと思ったのだ。
「……万太くん？」
不意に、ナノカの部屋のドアが開いた。
悪いことをしていたわけでもなんでもないのに、万太はびくりとする。明らかに、いつもの声ではない。かすれ、小さく震えている。
「お兄ちゃんは？」
ドアを閉める音。近づいてくるのがわかる。
仕方なく、万太は振り向いた。そしてすぐに後悔した。
目が真っ赤だ。泣いていたのはまちがいない。
お兄さん――！
心のなかで、叫ぶ。
無理です！
「お、お兄さんなら、ちょっと外へ……買い物に、行くそうです」
ナノカの好物を買いに出ているという事実は伏せておいたほうがいいような気がして、言葉を濁す。ふうん、とナノカは相づちをうった。
テレビの前の、背の低いソファにすわる。
ひざを抱えた。

そのまま、黙ってしまう。耐えられない沈黙だ。
なにか、声をかけたほうがいいだろうということは、わかっていた。パソコンを見せて、みな元気そうだとか、そんなことをいってもよかった。
しかし、そうではないような気がした。城のなかはどうやら安全らしいということは、確認してすぐにヒロシが部屋に向かっていっていた。彼女が落ち込んでいるのは、おそらくそういうことではない。
「お茶を、飲みますか。さきほどお兄さんが……」
「いいよ、ここあたしのうちだもん。自分でできるよ」
なけなしの気遣いでいってみるが、あっさりと返される。
「でも、ありがとう」
気遣いがという意味なのか、やっぱり欲しいという意味なのか。それすら万太にはわからなかったが、ナノカが動く様子はなさそうなので、立ち上がった。ヒロシが用意していたポットから、ナノカのものだという水玉のマグカップに茶を注ぐ。ハーブティーらしい。
ついでに、自分の分も用意する。ソファの前のローテーブルに起き、そして大変なことに気づいた。
自分の分をどうするか。パソコンデスクのイスにすわって飲むというのは、不自然だろうか。かといって隣にすわるというのもどうなのだろう。それはないような気がする。ぐるぐると頭のなかでシミュレーションしていくが、結論が出ない。
万太は学校の成績こそ常に一位をキープしていたが、対人関係のスキルは著しく低かった。それが対女の子となると、なおさらだ。しかもさっきまで泣いていて、見るからに落ち込んでいる女の子なのだ。
「すわらないの？」
固まっていると、ずばりいわれてしまう。ナノカがソファの端に寄り、二人がけにしては大きいソファに充分なスペースができる。
「で、では、失礼」

万太は隣にすわった。ごまかすように、マグカップに口をつける。
再び、沈黙。胃が痛い。どうすればいいのか、まったく未知の世界だ。
「こあらちゃんから、メールがきたの。待ってるって。だいじょうぶだよって」
ナノカから話題を振ってくれて、ほっとする。
「……そうですか」
メールを想像した。きっと押しつけがましいものではないのだろう。小亜羅なら、やりそうだ。おそらくは善意から。
しかし、ナノカの気持ちはどうなのだろう——万太は彼女にはなれなかったが、それでも想像した。
待っているといわれれば、行かなければならない。
実際に、行くのだろう。助けたい、なんとかしたいとも思っているはずだ。
ならばなぜ、彼女はいま、これほどまでに落ち込んでいるのか。
まだ出会って間もなかったが、ナノカならば、助けに行かなくちゃとすぐにでも行動しそうな気がした。そうしていないということは、やはり、なにかがあるのだ。
「先生がね」
ぽつりと、話し始める。先生というのは、竹ノ内のことだろう。
「先生がね、いってた。ヒーローってなんだって。あたし、気づいちゃった」
その声が、不穏な空気を帯び始めていることに、万太は気づいた。
泣く！
かもしれない。ハンカチハンカチ、ティッシュティッシュ——眼球のみの動きで探す。パンダのティッスケースを見つけたが、遠い。
「あたし、ヒーローじゃないんだよ。ヒーローみたいな力があるかもしれないけど、ヒーローじゃない。だってどうすればいいかわからないし……怖いんだよ。昨日から、なんでどうしてって、思ってる。それって、ヒーローじゃないよね？」

尋ねられてしまった。ナノカの目が、万太を見ている。
彼女を慰める言葉が、いくつか脳裏に浮かぶ。しかし口にしたのは、まったく違う言葉だった。
「やめてしまえばいい」
自分でも驚くほどの、きっぱりとした声だった。
「そう思うのなら、やめてしまえばいいんです。五歳のあなたはヒーローになりたかったのかもしれませんが、いまのあなたは十七歳で、しかもずっとこの町から離れていたんです。戸惑うのは、当然でしょう」
ナノカが、目を見開く。
その目から、大粒の涙がぼろりと落ちた。
「――！」
万太は思わず腰を浮かせる。しかしその袖を、ナノカがつかんだ。
「あたし、どうしたいのかなあ。こあらちゃんやみんなを、助けたいよ。竹ノ内先生だって、あたしを庇って連れて行かれちゃったんだよ。助けたいけど、でも助けられる気がしないの。すごく怖い。ヒーローって、ちがうよね？　こういうんじゃないよね？　もっとかっこよくて、強くて、すごいよね？」
「な、なら……助けに行けば、いいじゃないですか」
いってしまってから、ちがうと思う。ちがわないのだが、いいかたがあったはずだ。案の定、ナノカが声を張り上げる。
「冷たい！」
「しかたがないでしょう、どうすればいいのかわからないのは、こっちだって同じです！　どうしろっていうんですか！」
怒ってどうするんだと思いながらも、声が大きくなってしまう。
万太はメガネを外し、そのままかけ直した。
深呼吸をする。
「万太くんは……」
ナノカの目が冷たい。万太はそちらをちらりと見て、すぐに目をそらした。

「……なんですか」
「情けないなあ」
想像以上の言葉が返ってきた。万太のハートに刃が突き刺さる。
「な、情けない……」
「竹ノ内先生は、かっこよかったよ。先生だってヒーローだっていって、あたしを守ってくれたの。なんかね、ちょっとね、ドキドキしちゃった。こんな気持ち、初めてなの。かっこいいよね、竹ノ内先生」
予想外の展開だった。泣いていたはずのナノカの頬に、朱が差している。
万太の胸に、黒々とした重いものが生まれた。おもしろくない。もっと真面目な話をしていたはずだ。
「どうしてそういう話になるんですか。だいたい竹ノ内先生は三十八歳、僕の倍以上の人生経験があるんです。比べないでいただきたい」
「別に比べてないよ。万太くんが情けなくて、竹ノ内先生がかっこいいってだけだよ」
「比べてるじゃないですか思いっきり！」
あまりにもおもしろくない。万太は腕を組んだ。これだから女子はわからないんだと、いらいらを募らせる。
「いいですか。昨今では悩み成長するヒーローもうけているようですが、僕にいわせれば、ヒーローは一に熱血、二に熱血です。馬鹿なぐらいがちょうどいい。つまりあなたには向いているんです。なにを似合わないことをしているんですか」
いいかたは随分アレだったが、それでも万太なりの慰めを込める。しかしもちろん、伝わらなかった。
「ば……！　馬鹿ってことでしょ、遠回しだけどわかったよ！　なんでそういうことというのー！」
「遠くありません、むしろ率直にいったぐらいです」
「むわー！　このメガネー！」

不毛な争いだ。
しかし万太は、ほっとしていた。
少なくとも、その目から涙が出ることはもうなさそうだ。
「……なんとか、なりますよ」
自然に、そう口にしていた。
嘘ではなかった。普段は確証のないことは決していわない万太だったが、今回はなぜか、そう思った。
「あなたなら、だいじょうぶ。そんな気がします。僕もお兄さんも、三ッ山さんも……竹ノ内先生も、皆、あなたの味方です。ヒーローというのは、仲間からの応援でパワーアップするんですよ。だいじょうぶです」
「……そうかな」
ナノカの声が、また小さくなる。
「まあ、やめてしまえばいいとも、思っていますけどね」
「どっちなの」
「両方です」
これも、嘘ではない。
複雑だった。ナノカならなんとかしてしまいそうだと思う反面、すべてをこの小さな身体に背負わせてしまうのは酷だとも思う。
代われるものなら、代わりたい。
だがおそらく、それではいけないのだ。ナノカでなくては、意味がないのだ。ヒロシがいっていたように。
「みんな、あたしの味方かあ。本当にそうだったら、ちょっとかっこいいよね。ゴーストやっつけちゃーズみたいに、最終的には敵のゴーストだって味方になっちゃってさ」
万太のメガネが光った。
それは聞き捨てならない。あまりにも聞き捨てならない。
「いえそれは誤解です。あれはそもそも、最初からゴーストは実は敵ではなく、主人公たちに真の敵がだれであるのかを教えようとしていたというのが正しい解釈です。まあ、それが伝わるまでにやっ

つけられまくったわけですが」
「えー、でも悪さはしてたじゃん」
深くため息をつき、首を振る。まったくわかっていない。なんということだろう、ＤＶＤボックスで見直したばかりだというのに。
「あれはゴーストという生命体である以上避けられようのない性質であり、悪さという単純な言葉でくくるのには問題があります。そもそも、ゴーストというだけで敵だと決めつけ……」
万太は黙った。
「どうしたの？」
ナノカが首をかしげてくる。しかし、答えられない。答えられるほど明確なものではない。
しかし、たしかな予感。
「ゴースト……幽霊？」
つぶやくと、ナノカが目を見開いた。
「幽霊！」
立ち上がって、パソコンに向かっていく。しかし万太には、その必要はなかった。目撃情報ならすべて、頭のなかに入っていた。
まさか、という思い。
しかし、つじつまが合ってしまう。
「ぎゃ――――！」
そのとき、悲鳴が響いた。万太とナノカは顔を見合わせる。二人とも、すぐにわかった。ヒロシの声だ。
「お兄ちゃんっ？」
ナノカが窓に駆け寄る。万太も続くと、アパートの前で、ヒロシが風に捕まろうとしているところだった。エコバッグを振り回して応戦しているが、どう考えても分が悪い。
「そんな……！　学校じゃないのに！」
ナノカが悲痛な叫びをあげ、万太も舌打ちする。学校の外なら安全だなどという確証はなかった。そんなことはわかっていたのに。
「ナノカさん、このままでは……」

「わかってるよ！　あたし、行く！」
ナノカが窓に足をかける。
飛び降りようと、身を乗り出す。
しかし、止まってしまった。サッシをつかんだ彼女の手が異様に汗ばんでいるのを、万太は見た。
尋常ではない。
顔面も蒼白だ。
「どうしよう……下りられない。できるって気が、全然、しない」
目に涙が浮かんでいく。怖いとか勇気が出ないとか、そういった様子とは少しちがっていた。そもそもナノカが超人的な力を使うときには、いつも考えることなく、身体が勝手に動いているかのようだった。
できる気がしないのではない。
本当にできないのだ。
「まさか――」
万太は直感した。
ドキドキしちゃったといった、ナノカの顔が思い浮かぶ。
恥じらうような表情。こんな気持ちは初めてだとも、いっていた。
「『恋心』……？」
二人の目の前で、ヒロシは風に巻き上げられ、上空へと連れ去られていった。

scene_11　「ヒーローになりたい」

小亜羅が泣いている。
幼い小亜羅が、声を殺して、泣いている。
泣かないでといっても、泣きやまなかった。
遊ぼうよといっても、だめだった。
小亜羅はいじめられていた。
家が金持ちだというだけで、持っているものがほかの子よりも高級だというだけで、毎日の送り迎えがリムジンだというだけで、いじめられていた。
子どもたちだけではない、その保護者たちからも、特別な目を向けられていた。
同じ場所に立つことを、許されていなかった。
どれほど悲しかったことだろう。
「あたし、こあらちゃんを助けたい！」
出会ったころ、ナノカはまだ三歳だった。それでも強く、そう願った。
兄といつも見るアニメや、特撮番組のヒーローのように。町の平和を守り、人々を笑顔にする、それと同じように。
「ヒーローみたいに、こあらちゃんを笑顔にするの！」
それが、一番最初だ。
それからナノカの夢は、ヒーローになった。
友だちになろうと、何度もアタックした。初めて小亜羅が笑ってくれた日、ナノカは四歳になっていた。
自らの力で叶えた夢は、いつしか形を変えていったけれど、決して消えることはなかった。
いまでも、同じだ。
ヒーローになりたい。

小亜羅を、助けたい。

＊

「あたし、燃えてるよ」

ナノカは拳を握りしめ、つぶやいていた。隣では万太が腕を組んでうなっている。どうすればいいんだ、これは絶体絶命だと、ぶつぶつつぶやいているのがまる聞こえだ。

それでも気を遣っているのか、ずばりナノカにはいってこない。

とはいえ、さすがのナノカも、理解していた。

ヒーローとしての力を失ってしまった。

それは、事実だ。感覚としてわかった。もう自分には、あの力はない。

しかしそんなことは、いまのナノカにとって、ほとんど関係のないことだった。

「お城に行く」

力強く、決意を告げる。

格好良くいいきったのだが、大げさに驚いて、万太はまったく見当ちがいなことをいい出した。

「竹ノ内先生は……たしか妻子持ちで、大変な愛妻家、娘さんはそれはもうかわいらしく、将来はパパと結婚するのといわれたのだと、嬉しそうに話していました」

「……なにそれー」

とたんに気分が萎える。唇をとがらせ、反論した。

「ちがうでしょ、失恋すればいいってことじゃないんじゃないかな！　あたしいま真剣なの、燃えてるの！　お城に行くよ！　絶対に行く！」

「どうやって行くんですか！」

万太も気が焦っているのだろう、大声で切り返してくる。
しかしナノカは、それ以上に声を張り上げた。
「どうやってでも、行くんだよ！」
万太が黙る。ナノカは彼のメガネ――の奥の目を見つめて、ゆっくりといった。
「思い出したの、あたし、どうしてヒーローになりたかったのか。力はなくなっちゃったけど、心は取り戻したの。だからあたし、いま、ヒーローなんだよ」
「いや、いやいやいや」
万太が右手を突き出す。落ち着け、のポーズ。
ナノカは落ち着いていた。ナノカには、万太がなにをためらっているのかがわからなかった。
「だいじょうぶだよ。あたし、行けると思うな」
「行けないでしょう！　いまここから飛び降りることもできなかったじゃないですか。いったいどうやって空にある城に……そもそも、ヒーローとしての力があったとしても、行けたかどうか」
「うーん」
なるほど。首を右に左にかたむけて、頭を悩ませる。
いわれてみれば、もっともだった。ヒーローだからといって空が飛べるわけではなかったし、ましてやいまはヒーローでもない。
「なんでそういう現実的なこと、いうかなー」
「むしろ感謝していただきたいですね。もうちょっと、いまの状況を考えてください」
「むーん」
ほんの少し前までは、城にだってどこにだって行けるという気持ちだったのに、だんだんと「不可能」という言葉がのしかかってくる。
ナノカは急いで首を振った。
ちがう、そうではない。
それでは本当に、行けなくなってしまう。

「じゃあちゃんと、考える。そんで、現実見るよ」
ナノカは万太に向かって、親指を立てた。自信たっぷりに、深くうなずく。
「だから、行ってくる！」
まだ制服のままだったが、そんなことはお構いなしだ。ナノカは革靴に足をつっこみ、玄関から飛び出した。
「ち……ちょっと待ってください！　鍵！　電気と、ガスの元栓は……ああもうっ」
うしろから声が飛んでくる。もちろん、そんなことにかまっている場合でもない。
ナノカの目指す場所は、城だ。だがその前に、行くべきところがあった。
いまはもう、超人的な速さで走ることはできないが、それでもすぐにたどり着くだろう。幼いころから通い慣れた場所、それに昨日も行ったばかりだ。
「僕も行きます！」
随分遅れて、万太が追ってくる。ナノカはついてくるなというつもりもなく、また待ってやる気もなかった。どんどん汗が流れていく。これが普通なのだと、認識する。
十分近く走っただろうか。ナノカはやっと、見慣れたその場所に、たどり着いた。
公園だ。
住宅街のなかに、ぽつんとひとつ。広くもない狭くもない、手頃なサイズだ。象の滑り台、シーソー、砂場、鉄棒……いまは、遊ぶ子どもの姿はない。
「こ、ここは……？」
肩で息をして、追いついてきた万太がいう。
「ナゾ仮面が出没する場所だよ」
「Ｊ・Ｊが？」
万太はいつも、正しくナゾ仮面の名を呼んだ。万太がいってくれ

なければずっと忘れていそうだ。せっかくなので、ナノカはそちらを採用することにする。
息を吸い込んだ。
昨日のような大声は出ない。それでも、できるかぎりの声を、張り上げる。
「Ｊ・Ｊさん――――！」
昨日とは比べものにならない、昨日があったぶんだけ余計に頼りない声だった。それでもナノカは、何度も、息を吸い込んだ。
「Ｊ・Ｊさーん！　Ｊ・Ｊ――！　ナゾ仮面――！」
腹の奥から、喉をからして、呼びかける。きっと聞こえるはずだ。遠くに出かけていないかぎり。
「Ｊ・Ｊを呼んで……どうするつもりですか」
ナノカのもくろみに気づいたのだろう。万太の声が怒気を帯びる。
ナノカはそれでも、やめるわけにはいかなかった。何度も何度も、呼び続ける。
「Ｊ・Ｊさん！　出ないと仮面をちょん切るぞ――！」
「ナノカさん、まさか……」
万太がナノカの肩をつかむ。ナノカは振り向いて、そして小さく声をあげた。
万太の向こう側、十二年前と、そして昨日と同じように黒い仮面をつけた燕尾服の男が、まるでずっとそこにいたような顔をして、紙袋を片手に立っていた。
「まったく、品のない呼び方を」
不快そうに、そんなことをいう。ナノカは思わず飛びつきたくなったが、間に万太がいるのでぐっと堪える。
そして、気づいた。Ｊ・Ｊの持っている紙袋。
「キムラだ！」
状況も忘れ、叫ぶ。彼が持っていたのは、ナノカ御用達、愛するレーズンバターサンドの洋菓子屋、キムラの紙袋だったのだ。
「まさか……レーズンバターサンド？」

昨日食べたばかりのあの味が、口のなかに広がる。食べたい。ああ食べたい。
「そう、君が教えてくれた十二年前から、ちょっとしたお気に入りでね。この界隈のものは制覇したが、ここが一番おいしい。別格だ」
「わかる、わかるよ！　キムラのレーズンバターサンドは最高だよね！　それ、ネットで注文できるんだよ。あたし引っ越しちゃってからも、よくお取り寄せしてたんだー」
「ほう、お取り寄せ」
「……ナノカさん」
しびれを切らしたように、万太が咳払いをする。そうだった、それどころじゃなかったと、ナノカは改めてＪ・Ｊを見据えた。
相変わらず、胡散臭い。胡散臭さをわざわざ表現しているとしか思えない。
「そのかっこうで、キムラまでお買い物に……？」
「ナノカさん！」
しかし気になった。答えてくれないかなと待ってみるが、Ｊ・Ｊがそれについて返答する様子はない。
ナノカは諦めることにする。もちろん、要件はそんなことではないのだ。
「今日は、お願いがあって呼んだの」
そう切り出すと、仮面の奥で、Ｊ・Ｊはおもしそうに目を細めた。
「ほう。せっかく心を取り戻したのに、また私と契約を？」
わかるの、と尋ねようかとも思ったが、やめた。このナゾ仮面を、自分の尺度で測ってはいけない。おそらく人間ですらない。
「いいとも、聞こうではないか。今度は、なにになりたいのかな、お嬢ちゃん？」
挑発的なものいいだ。しかしナノカは、ひるまなかった。
万太がなにかいいたげにこちらを見ているのがわかったが、目を合わせるわけにはいかない。決意は揺るがない自信がある。しかし、いえばきっと止められる。

深呼吸をする。
十二年前よりも大きな、たしかな気持ちで、その言葉を舌に乗せた。
「ヒーローになりたい」
Ｊ・Ｊがかすかに眉を上げる。万太は驚いている様子はない。それどころか、やっぱりなというような様子で息をつき、ナノカとＪ・Ｊの間から一歩場所を空けた。もう好きにしろということなのだろうか。
「それは、願ってもないな。二度目の心は絶品だ。ただ……野中ナノカ、同じ願いを二度ともなると、今度はそう簡単に心は元に戻らない。もしかしたら一生、戻らないかもしれないが？」
一生――しかしその言葉も、ナノカの決意を変えることはなかった。
真偽の問題ではなかった。もしかしたらナノカの楽観性がそうさせたのかもしれない。どちらにしろそれは、いまのナノカにとって、それほど重要なことではない。
ナノカはきっぱりと、首を縦に振った。
「いいよ。いらない」
「ナノカさん！　よく考えてください、もし一生戻らなかったら……」
「いいの」
万太に向かって、微笑む。根拠はまったくなかったが、それでも自信があった。
それは、いつかきっと。
いまではなくても、だいじょうぶだ。
「恋とかそういうのは、もっと大人になってからでいいの。あたし、いまはもっと大事なものがあるから。だからお願い、ナゾ仮面」
「Ｊ・Ｊだ」
「ええと、お願いします、Ｊ・Ｊさん」
ナノカは頭を下げた。ツインテールもいっしょに垂れ下がる。

「大人になってからって……だから一生かもしれないといま……」
万太が慌てたようになにかをいっているが、聞こえない。聞かない。聞いたところで、変わらない。
ナノカは頭を上げなかった。
イエスといってもらえるまでは、動けない。もう自分には、この方法しか思いつかないのだ。
「いいだろう」
いつかのように、静かに、Ｊ・Ｊがいった。
「え、いいの？」
勢いよく顔を上げる。Ｊ・Ｊは静かに笑んでいた。
「もちろん。これは取引だ。私としては美味な心がいただけるのだからね、断る理由はないんだよ」
ナノカの目が輝いていく。ヒーローになれるのだ。もう一度――今度こそ、本当の意味で。
「じゃあじゃあ、いますぐに……――」
お願い、といおうとしたのだが、万太はそれを遮った。
「待ってください」
メガネを光らせ、万太はナノカとＪ・Ｊの間に割り込んでいた。静止させるように右手を突き出し、左手でメガネを押さえる。
「そもそもあなたは、何者なんですか」
「またその質問か」
Ｊ・Ｊが肩をすくめる。昨日とまったく同じように、気取った調子で答えた。
「私は美しき闇商人だ。それ以上でも、以下でもない」
「あなたはなぜここに、いるんですか」
万太がたたみかけると、興味深そうに腕を組んだ。
「……ふむ。とある家に封印されていたが、十二年前に、解放されたのさ。ある目的でね」
さらりと答える。そんなことも答えてくれるのかと、ナノカは驚くとともに感心する。

「さあ、そこをどいてもらおうか。私はお嬢ちゃんと、取り引きがあるんだ」
しかし万太は、動かなかった。Ｊ・Ｊを見据える。
「条件があります」
有無をいわせぬ、強い口調だ。
まだなにかあるのかと、ナノカはいっそ呆れる。もしかしたら万太は商人に向いているのかもしれない。ナノカとしては一刻も早くヒーローになって、空へ行きたいのだ。
それでももう、万太に対しては、一定以上の信頼感があった。彼のいうことならばまちがいないはずだと、黙って見守る。
Ｊ・Ｊは、顎を挙げ、万太を見下ろした。彼はこのやりとりを楽しんでいるようだった。
「条件とは？」
万太は目線を逸らさずに、対等な位置から、それを突きつける。
「悪将軍の失っている心がなんなのかを、教えてください。それともう一つ――僕たちをあの城まで、送っていただきたい」
「ほう」
Ｊ・Ｊの声質が、変わった。
怒り、ではない。商人としての血でもうずくのだろうか。まるで楽しくて仕方がない、というような声。
「見返りは？」
続けて、問う。
ナノカも、万太を見た。なにをいいだすのだろう。
Ｊ・Ｊは、商人だ。対価を要求してくるはずだ。
もしも万太が、自分の心を差し出すようなことがあったら――考えただけで、ぞっとした。ナノカは慌てて、手を挙げていた。
「ハイ！　ええと……な、なにが欲しい？」
発言したわりには、ノープランだ。万太の冷たい目が突き刺さる。馬鹿ですかといっているのがわかる。
しかしＪ・Ｊは、肩を揺らした。楽しそうに笑い出す。

「本当に、まったく、おもしろいお嬢ちゃんだ。そうだね……なら、教えてもらおうかな」
ナノカと万太に、緊張が走る。反比例するように悠然と微笑んで、J・Jは問いを投げた。
「君がいった、『もっと大事なもの』というのは、なんなのかな？」
ナノカは目をまたたかせる。そんなことでいいのだろうか。
いまのナノカにとって、恋心よりも、大事なもの。
そんなものは、決まっていた。
ずっと守りたいと思っていたもの。そしておそらく、守ってあげられていなかったもの。
「友だち！」
はっきりと、答える。
J・Jは、驚いたようだった。長い間を挟んで、それから静かに、笑う。
「なるほどね。もう気づいているだろうに、お友達か」
J・Jは肩を揺らした。おもしろがっているのはたしかなようだったが、かすかな優しさが滲んでいることに、ナノカは気づいた。
もしかしたら、それほど悪いひとではないのかもしれない。万太のいっていたことが、頭をよぎる。
あれはゴーストという生命体である以上避けられようのない性質だ――ナノカがゴーストの所行を悪さと表現したら、そう反論したのだ。もしかしたらJ・Jも、そういうことなのではないだろうか。
「気に入ったよ、野中ナノカ。行動は破天荒で想像がつかない、口を開けばまるで馬鹿なようだが、信念がある……十二年間変わらなかったというのは、貴重だ。そして極めつけが、レーズンバターサンド」
極めつけなんだ――！　でもわかる！
ナノカは誇らしげに、Vサインをした。キムラ最高。
「そんなに気に入ったなら、もうひとつのおすすめ、教えてあげるよ。お城から、帰ってきたらね」

「いいだろう。私も君たちの結末には、興味がある」
Ｊ・Ｊの目が、光り出す。
「お友達を、後悔させてあげるといい――」
最後の言葉は、万太に向けていったようだった。万太がはっとして、弾かれたようにＪ・Ｊを見る。ナノカにはいまいちなんのことだかわからない。
Ｊ・Ｊの白いグローブをつけた手が、ナノカの胸元に伸びていく。
「契約成立だ」
ナノカの胸から、いつか見たよりも大きく育った光が、浮かび上がる。Ｊ・Ｊがそれを口に入れると同時に、視界が光に覆われた。
「特別大サービスだよ」
光のなかで、声が響く。
「なになに……――っ？」
ナノカは思わず、万太の腕をつかんだ。万太はこの状況でも、メガネを押さえている。
足が、宙に浮いていた。見えない力に、押し上げられていく。最初はゆっくり、徐々に加速していき、とうとうジェットコースターなみのスピードで、突き上げられる。
叫ぶ間もないほどの、一瞬だった。
着地はひどく優しく、まるで壊れ物を扱うように――ナノカと万太の二人は、あっというまに城へとたどり着いていた。

scene_12　「だから、助けに来たの」

三ッ山小亜羅には、すぐにわかった。
扉の開く音、走っていく音。遠くでは、激しい物音。ごく静かだった城に、音が生まれ出す。
指示に従って、城にいる人間のうち一部が、動き出したのだ。
「ナノカちゃん、来てくれたのね……！」
胸が高鳴った。とうとう、ナノカが来たのだ。大勢がこの城に連れ去られたのが今朝、いまはまだ夕方にもなっていない。本当はもっとすぐにという期待もあったが、それでも充分だった。
小亜羅がいるのは、この城にならぶ部屋のなかでも一際大きく、絢爛な部屋だった。教師が指示を出して割り振るようならばどこでもいいと思っていたが、そういうわけでもなさそうだったので、使わせてもらうことにした。天蓋付きのベッドは自宅のものよりは小さいが、品があり気に入っている。
だが、ここで一夜を過ごすことはなさそうだった。
ナノカが城へ来たのだから。もう、この部屋にいることもない。
「わたし、待ってるわ」
うっとりと、つぶやく。
その部屋の扉が、突然開いた。
ノックをするつもりなど最初からなかったというように、勢いよく。フリルエプロンの見知った男性と、目が合ってしまう。
「お兄さま！」
小亜羅は目を輝かせた。ちょうど、会いに行こうと思っていたところだったのだ。
「お兄さまも、連れてこられてしまったんですね。おケガはありませんか？」
とりあえずの礼儀だ。ごく心配そうに問いかけたのだが、もちろんケガなどしていないことはわかっていた。城に連れてこられるこ

とでケガをした人物はひとりもいない。
「やー、やっと見つけた、小亜羅ちゃん。それっぽいとこぜんぶ開けてさ、広いからもう見つけらんないんじゃないかとあきらめるところだったよ」
なぜか手には、エコバッグを持っている。小亜羅は首をかしげた。
「わたしを、探していたのですか？」
「おう、ちょっと話があってね。あ、これ、コレッキヨのまんじゅう。食べる？」
エコバッグからまんじゅうの包みを取り出し、差し出してくる。ナノカの好物だ。小亜羅はありがたく受け取りはしたものの、そのままサイドボードに置いた。
「あとで、いただきます。いまはなんだか、喉をとおる気がしなくて」
「緊張？　興奮？　……もしかして、ワクワクしてる？」
小亜羅は、ほんの少し目を細めた。
「なんのことでしょう？」
ヒロシはにやりと笑う。フリルエプロンの下に手を入れて、ズボンのポケットから携帯電話を取りだした。カチカチと慣れた手つきで操作して、小亜羅に画面を見せてくる。
小亜羅はちらりと見て、そしてすぐに理解した。
幽霊目撃情報が、一覧になってまとめられていた。

水無月景子
津田真
八代友人
真下ゆな
近藤卓
浅井光輝
楽谷彩華

ぜんぶで、七人だ。
小亜羅は知っている。これ以上増えることは、決してない。
これで、完成なのだから。
「まあ、最初の四人か……三人ぐらいまででわかりそうなもんだったけどなあ。単純すぎて、逆にわかんなかった。さすがにもう、ナノカも気づいてると思うけどな。万太くんもいるし」
「気づいてもらわなきゃ、おもしろくないわ」
本心から、小亜羅はいう。わざわざ『ゴーストやっつけちゃーズ』まで渡したのだ。隠された名に気づいたとき、ナノカはどんな顔をするだろう、いったいなにを思うのだろう……想像するだけで、胸が高鳴った。
「別に実際に見てなくても、そういう指示書を貼り付けておけば、貼られたやつはそう証言するわけだ。やるなあ、小亜羅ちゃん」
茶化しているというわけではなく、本気で感心しているようだ。そういう素直な反応ならば、悪い気はしない。小亜羅はにっこりと微笑んだ。
「わたし、いっぱい考えたんです。できそうでできないことだと思いませんか？　もちろん、できるということに気づいたから、やろうと思ったのですけど」
「たしかになー。『ら』の楽谷とか珍しい名字だもんな」
ヒロシがしきりにうなずく。小亜羅は嬉しくてたまらなくなった。いたずらが成功した気分だ。
「さすがお兄さま！　そうなんです、だから思いついたぐらいなんです。それで、そのことを伝えるために、ここへ？」
問うと、ヒロシは首を左右に振った。
「ま、それもあるけど……見に来たんだよ、オレは。オレはあいつのお兄ちゃんだからな。最初は、悪将軍なんて見つけたら、ぶったおしてやろうと思ってたんだ。オレのこの拳で！　ガツンと！」
拳に息を吹きかける。強そう弱そうという以前に、新妻仕様のエプロンが根本を台無しにしている。

しかしそれが、ヒロシらしいという気もした。小亜羅は穏やかに笑って、小首をかしげる。
「ガツンと、しないんですか？」
「しないよ。小亜羅ちゃんは、ナノカの大事な友だちだ」
小亜羅は眉をひそめた。
あたりまえだ。そんなことはあたりまえだ。小亜羅はだれよりもナノカのことを愛している。たとえ家族が相手でも負けないという自信がある。それは一方通行などではなく、ナノカもまた自分を大切にしてくれているということも、よくわかっている。
しかし、自分では理由のよくわからない、得体の知れない苛立ちが生まれていた。ヒロシがさらりと流したことが、なぜか気に入らなかった。
「お兄さまは、きっと、ナノカちゃんをそれほど愛していないんだわ」
そうでなくては、おかしいという気がした。
なにかが、まちがっている。
まちがっているのは、決して、自分ではない。小亜羅は正しいのだ。すべては愛ゆえの行動なのだから。
「愛してるさ。世界で一番大事な、妹だ」
城が、揺れた。
内部から揺さぶられたような衝撃。ヒロシが派手によろめく。
ナノカが暴れているであろうことは、明白だ。きっと想像以上に派手に。
ならばすぐに、移動しなければならない。
小亜羅は平然と立ち上がると、扉に向かった。
「よろしければ、一緒にご覧になりませんか。ナノカちゃんの大活躍を」
「あ、ああ」
うなずくヒロシに手をさしのべるようなことは、もちろんしない。
小亜羅は部屋を出ると、颯爽と廊下を進んだ。時折城そのものが

揺れたが、足を取られるようなことはなかった。
ナノカが戦っているのだ。
高揚していく。たまらない。ヒーローとして、悪将軍を倒しに来たのだ。立ちふさがるのは同じ学校に通う高校生たちや、教師たち。彼女はいったい、どんな顔をして戦っているのだろう。
悩み、苦しんでいるのだろうか。
ぞくぞくした。
「待っていてね、ナノカちゃん」
自然と、早足になる。廊下をぐるりと回って、階段を上がる。石の扉を開けると、巨大なドームが待っていた。装飾の一切ない、石造りのだだっ広い空間。まさに、コロセウムだ。
そうなるように、設計した。ホールや居住空間は城のほんの一部、その上階は丸ごと、ナノカのための場所だった。
中央に、生徒や教師たちが転がっている。眠っているのだ。指示を出せば、いつでも動き出す。
いまナノカに襲いかかっているのは、城にいるうちの三分の一程度だった。足止めというほどでもない。あえていうならば、揺さぶりだ。
「おわ、徹底してるなー。さすが、三ッ山財閥」
「あら、家は関係ないです。設備のために多少のお金は使いましたが、それだけです。なかなかでしょう？」
ヒロシは口を開けて、見とれている。小亜羅はその表情に、多少の満足感を得ていた。
本当は自慢したかった。だれよりもナノカに。すごいでしょうよくできているでしょうと、城のすべてを見せてまわりたかった。
やっと今日、それが叶うのだ。ナノカはなんというだろう。
「さあ、お兄さま。特等席が用意してあります」
小亜羅がいうと、ヒロシがきょろきょろとあたりを見回す。見当たらないのだろう。見事なほどになにもないのだ。
その反応を存分に楽しんでから、小亜羅はそっと、人差し指を上

に向けた。
「あそこです」
吹き抜けになった高い高い天井までの中間地点に、出っ張った床があった。まるで水泳の飛び込み台のように、そこにだけ足場がある。
ちがうのは、階段もはしごも一切ないことだった。それこそ空を飛ばない限り、たどり着くことはできない。
「高っ！」
首をいっぱいに上に向けたヒロシが、叫ぶ。続けてなにかをいおうとしたようだったが、巻き起こった風がそれを悲鳴に変えた。
「う、うわっ」
二人の身体が、宙に浮いていた。ヒロシがしがみつこうと手を伸ばして来るが、小亜羅は最小限の動きでそれを避ける。
「だいじょうぶです、安心して」
そうはいっても安心できないだろうとことはわかっていたが、とりあえずはそういうほかにない。
風は二人の足もとで渦を巻き、まるでエレベーターのように勢いよく上昇した。ほんの一呼吸の間に、『特等席』に到着する。
といっても、イスなどない。
代わりに、打ち込まれた鉄杭と、そこに繋がれた鎖、そして手錠。
「あれ？」
ヒロシが声をあげる。
「これ、もしかして……あれオレ……あ、そういうこと？」
「気づいちゃいましたね、お兄さま」
小亜羅は天使のように微笑んで、ヒロシの腕をつかんだ。素早く右腕に手錠をはめる。
「人質というやつです」
「……ですよねー」
しかしどうやら、抵抗する気はないようだ。抵抗しても無駄だとわかったのだろう。いっそ特等席からの眺めを堪能することにした

のかもしれない。
小亜羅は念のため、ヒロシから距離を取る。特等席の端により、柵に両腕をかけた。顎を乗せ、見下ろす。
そろそろ来るはずだ。
たまらない緊張感だった。
きっと、あの石の扉から。扉を開けてくるだろうか。それとも力任せに、蹴破ってくるだろうか。
「早く来て、ナノカちゃん」
期待に胸が膨らんでいく。
しかし、現実は、小亜羅の想像をはるかに超えていた。
浮遊する城にはあるまじき、地鳴りのような細かい揺れ。地の底からわき上がるような、不穏な音が響く。
「下？」
小亜羅は身を乗り出した。中央には、依然として眠っている生徒たち。彼らの身体が、揺れている。
「こ――こ――か――！」
巨大な叫び声と同時に、轟音。
まるで火山の噴火のように、拳を突き上げたナノカが、床を破壊して飛び出してきた。
足に、羽島万太がくっついている。床と一緒に持ち上げられた全員が、眠ったまま花火のように散り、ぼとぼとと落ちていく。
「っあ――――……」
切ない声をあげ、万太も落ちた。
ナノカは、颯爽と着地した。あたりを見回し、気を失っている生徒たちに気づく。口元に手を当て、悲痛な声をあげた。
「なんて、ひどいことを……！」
どうやら本気だ。小亜羅は目を見開いて、しばらくは声も出せない。
しかしやがて、楽しくて仕方がなくなってきた。肩を揺らして、堪えきれなくなって、笑い出す。

「ナノカちゃん、素敵！　そうでなくっちゃ！」
声を聞いてやっと、気づいたのだろう。ナノカが顔を上げる。
視線が絡み合った。
ナノカの表情が、笑顔になる。
「こあらちゃん！」
「わたし、ナノカちゃんが来てくれるの、ずっと待ってたわ」
そういうと、ナノカはすぐに、泣きそうな顔をした。たったそれだけで、小亜羅はたまらない高揚感を味わう。
待ちに待った瞬間だった。
十二年間、ナノカと離れている間、ずっと考えていたのだ。
ヒーローであるナノカにとって、最高の舞台とはなにか。
どうすれば、ナノカが喜んでくれるのか。
小亜羅は、ナノカのすべてを愛していた。
笑顔も、泣き顔も、苦痛に歪む顔も。
なにもかも、すべて。
もっと見たい。
もっともっと、見たい。
「ナノカ！　お兄ちゃんは、無事だぞ――！」
小亜羅のうしろで、ヒロシが声を張り上げる。
「あっ」
ナノカはヒロシを見た。
「うん、そうそう。良かった、お兄ちゃん！」
「ナーノカ――！」
ヒロシの声が、涙声になる。
小亜羅は、試してみたい気持ちになった。
ヒロシのいうように、本当に、気づいているのだろうか。
気づいていて、こうしてここに来たのだろうか。
「ナノカちゃん、わたしを、助けに来てくれたのよね？」
精一杯、ヒロインのような顔をして、問う。
ナノカは、うなずいた。力一杯、そこになんの迷いもないことが、

遠目にもわかる。
「そう。助けに来たんだよ、こあらちゃん」
「嬉しい、ナノカちゃん！」
言葉にならない。嬉しくてたまらない。同時に、なんて愚かなんだろうと、愛しさがこみ上げる。
「ねえねえ、気づいていない？　まだわかっていない？　わたし、囚われのお姫様なんかじゃないのよ、わからない？」
どんな顔をするだろう。
驚くだろうか。
悲しむだろうか、泣くだろうか。
ぜんぶを見たかった。
小亜羅のためだけに、小亜羅のせいで、表情を変えるナノカを。
「わたしよ！　悪将軍って、わたしのことよ！」
しかし、ナノカは表情を変えなかった。
力強く光を宿した瞳で、じっと、小亜羅を見ていた。
「知ってる」
はっきりと、うなずく。
「だから、助けに来たの」
「ああ……！」
小亜羅は歓喜に打ち震える。
柵に手をかけ、ひらりと飛び越えた。
しかし、落ちることはない。風が、小亜羅を取り巻いている。ナノカのすぐ近くまで下降し、愛しい友人を、見下ろす。
「じゃあ、戦いましょう、ナノカちゃん」
全開の笑顔でそういって、両手を振り上げた。

scene_13　「大好き」

小亜羅の両手から、風が繰り出される。
まるで意志を持っているかのように、真っ直ぐに。恐ろしいほどの風の音がその威力を物語っていたが、ナノカは身じろぎしなかった。
避ける気はなかった。
目を閉じることもない。
ただ正面から、受ける。
「――――っ！」
衝撃に、一瞬だけ目を細めた。風の塊はナノカに襲いかかり、そのまま身体を攫う。自覚のないままに吹き飛ばされ、背中に衝撃が走る。石の壁に打ちつけられたのだ。ナノカは身体をくの字にして、それでも倒れない。
口のなかに、血の味が広がった。咳き込むと、鮮血が飛び出す。
拭って、ほんの一瞬もうろうとした意識を引き戻すために、急いで首を左右に振った。
これぐらいなら、耐えられる。
まだまだ、だいじょうぶだ。
「ナノカちゃんったら」
風をまとった小亜羅が、悲しそうな顔をしていた。
「避けたほうがいいと思うわ。ケガをしてしまうじゃない」
いつもどおりの、小亜羅だ。ごく心配そうに、そんなことをいってくる。
ナノカは、唇を噛んだ。
小亜羅が変わってしまったとは思わない。友だちでなくなってしまったとも思わない。
ただ、いまの彼女の行動の責任は、自分にあることを知っていた。
ナノカのせいだ。

「ごめんね」
小亜羅に会ったら最初にいおうと思っていた言葉だった。なにをいっているかわからないというように、小亜羅が不思議そうな顔をする。
「『ごめんね』？」
「うん。ごめんね。あたしのためでしょう、こあらちゃん。あたしがヒーローだから、あたしのために、悪将軍になってくれたんでしょう」
ナノカは、あたしのせい、といういいかたはしなかった。
あたしのため。
小亜羅の眉が、かすかに怒りの形に動く。
「そうよ、あたりまえだわ。ナノカちゃんのためよ。でもごめんねっていわれるのは、なんだかちがう気がするわ。ナノカちゃんのためだけど、わたしのためでもあるの。だってわたしは、ナノカちゃんが大好きなの。知ってるでしょう？」
音もなく、床に足をつける。
ゆっくりとナノカに歩み寄り、小亜羅は白い手を持ち上げた。
ナノカの頬に触れる。
ナノカは動かない。これは、小亜羅の手だ。動く理由がない。
「ナノカちゃんの、ぜんぶが好きなの。ぜんぶ見たいの。もっと見せて。泣いてもいいのよ。怒ってもいいのよ」
もう片方の手を、うしろに引く。
なにをされるのか、ナノカはわかった。けれど、それだけだった。ぐっと身体に力を込める。
「――――っ」
悲鳴を押し殺した。
見た目からは想像できないほどの力で、小亜羅の細い腕は、ナノカのみぞおちを殴りつけていた。
遅れて、血を吐き出す。
「血で彩られた姿も、本当に綺麗」

恍惚とした表情で、小亜羅がつぶやく。
ナノカの目に映る小亜羅の姿が、とうとう滲んだ。
涙が溢れてくる。
泣いてはいけないと思っていたのに、堪えられない。ぼろりと一粒が血の中に落ちて、ナノカは悔しさに顔を歪める。
「こあらちゃん、あたしこあらちゃんを助けたい。ねえ、新しいノート、一緒に買いに行こうよ。かわいいお店教えてよ。寄り道して、甘いもの食べて、たくさんおしゃべりしようよ」
言葉にしてしまえば余計に、涙が止まらなくなった。ここまでやったのだ。いってもむだだということはわかっていた。
小亜羅が喜びに頬を紅潮させる。なぜそんな顔をするのだろうと、ナノカの悲しさは増していく。
しかし本当は、わかっていた。
これではだめなのだ。
友だちなのだから。このままで、いいはずがない。
「……つくづく、馬鹿ですか、本当に！」
小亜羅の身体が、突然ナノカの視界から外れた。
倒れ、気を失っているとばかり思っていた万太が、小亜羅に体当たりしたのだ。ダメージにこそなっていないだろうが、小亜羅はよろめき、おそろしいほどの形相で万太を睨みつける。
「この……イヌ！　なんの権利があって、邪魔をするの！」
「権利などなくても、邪魔はできますよ。そこの頭の回転の遅いヒーローに時間をあげるぐらい、僕にもできるでしょうからね。――ナノカさん」
なぜか、万太はすでに満身創痍だ。メガネが歪んでいる。ここにたどり着くまで万太のことをお構いなしに暴れてきたので、なぜかもなにもないのだが、ナノカは原因不明ということにしておく。
「いいですか、あとのことは、終わってから考えればいい。頭を使うことは僕にまかせて、あなたはあなたの心に正直に……――馬鹿は馬鹿なりに、猪突猛進してください。なんのために、ここに来た

んですか」
「万太くん……」
ナノカは、うなずいた。
考えていなかったわけではない。結論は出ていた。やるべきことも、できることも、知っていた。
「説得できないなら、しようがないよね」
「説得？」
小亜羅が首をかしげる。説得された覚えなどないといいたげだ。ナノカはいわれたとおり、細かいことは考えないことにした。首を何度も振る。
ゆっくりと息を吸い込んで、倍の時間をかけて、吐きだしていく。力がみなぎってきていた。
本当の意味で、ヒーローになる。
小亜羅を、助けるために。
「やっつけるよ、悪将軍！　それでそれが終わったら、一緒に帰るの、こあらちゃんと！」
両の拳を握りしめ、構える。
相手がだれであろうと――愛する友人だからこそ、やらなくてはならない。
「だから、拳で、語り合おう！」
ナノカは床を蹴った。小亜羅が目を見開き、風の力で身を翻す。
「素敵――！　そうよ、ナノカちゃん！　見たかったの、その姿、本当にかっこいいんだもの！」
「あーたたたたたたっ！」
目にもとまらぬ速さで拳を繰り出していく。しかし風を味方につけている小亜羅には、当たらない。彼女には避けようという意識すらないように思われた。ほんの少しの挙動で、しかしどうしても当たらないのだ。
「これが、ラスボス……！　なんか卑怯くさい！」
「あら、そうでなくてはいけないわ。ヒーローだから勝ってあたり

まえというわけではないじゃない？　それこそ卑怯だわ」
「むむーっ」
ナノカは歯噛みする。たしかにそのとおりだ。たぶん。
あとは髪が金色になって逆立つしか勝ち目はないかもしれない――ちらりとそんなことを思うが、しかし考えるのはやめた。
猪突猛進だ。
それしかない。
「実現させてやろうじゃないの、勝ってあたりまえ――！」
ナノカは小亜羅に背を向けた。壁に向かって突進する。途中、倒れ伏している花ノ宮高校の人々は器用に避けつつ――まれに踏みつつ――壁の直前で跳躍する。
「壁登りぃい！」
いってみて、やってみた。登れた。
「説明しよう！　ナノカのヒーローとしての資質を持ってすれば、壁を登ることなど、お茶の子さいさいなのだ――！」
ものすごく遠いところで、ヒロシが解説しているが、あまり聞こえてこない。
「なんでもありですか！」
下のほうで、万太が正しいつっこみ。
「壁を登って、どうするの。わたしは空を飛べるのよ。忘れたの？」
「そういう問題じゃないんだよ！」
ナノカは叫んだ。
天井すれすれまでのぼりきって、両足を曲げる。自分の足には強力なバネが入っているのだと信じて疑わず、飛び上がる。
「上からのほうが、カッコイイでしょ！　縦、一文字切り――！」
手套を上から構えて、落下する。予想していたといわんばかりに小亜羅がひらりと身をかわすが、さすがのナノカもそれぐらい予想していた。
「――と見せかけて、横、一文字切りぃ！」
構えを垂直に変えて、鋭く切りつける。

小亜羅は遠い。悠然と避けている――かのようだった。
ナノカの手から、衝撃波が生まれていた。
まるでレーザービームのように、城の壁をえぐるようにして、ナノカの手が描いたとおりの軌跡を焼き尽くしていく。その奇跡上にいた小亜羅も、さすがに避けることはできなかった。「きゃあ――――っ！」
ダイナミックに、直撃する。
小亜羅の身体が浮き上がり、落ちていく。まるでスローモーションのように。
「ちょ……ちょっとちょっと、それはちょっと……！」
万太が一昔前の芸人のような声をあげているが、ナノカは無視。ストンと着地してすぐに、もう一度飛び上がった。今度は斜め四十五度、のけぞる小亜羅に向かって飛びかかる。
「ブレストファイア――――！」
胸を張り、ファイアーといいながら両手でタックル。まるで力の塊のようなナノカに押されるようにして、小亜羅は当然のようにそのまま吹っ飛ばされた。壁に激突し、石の壁に亀裂が走る。
「説明しよう！」
特等席で、ヒロシが声をあげていた。
「卑怯臭いのだ！」
「そんなことないもん！」
ナノカはとりあえず反論しておく。卑怯臭いなどと、そんなことはない。とんでもない濡れ衣だ。
小亜羅を助けたい。
助けるためならば、全力で、やっつける。
「猪突猛進……しろとはいいましたけども……！」
万太がうちひしがれている。しかしそれも気にせず、ナノカは力なく倒れてしまった小亜羅を見下ろした。
「うう……」
髪が乱れ、口からは血が垂れている。

ナノカはしっかりと、その姿を見た。
目を逸らしてはいけない。自分がやったのだから。
正しいと信じていることが、ひとを傷つけていいことにはならないのだから。
「こあらちゃん」
ナノカは小亜羅に、戻ってとか、思い出してとか、そんなことをいうつもりはなかった。
それは、ただの押しつけだ。
「まだまだ、これからだよ」
引き続き、ファイティングポーズ。小亜羅はよろよろと身体を起こした。
「強い……！」
呻きながら、立ち上がる。
ナノカは少しほっとして、それから左手を腰に当てた。右手で親指を立てて、突き出す。
「うん。あたし、ヒーローだから！」
それ以上でも、以下でもなく。
この状況ならば、無敵だという気がしていた。
「でも……でもね、ナノカちゃん。わたし、あなたの弱点、知ってるわ。ここがどこだか、知っているでしょう？」
よろめきながらもナノカとの距離を広げつつ、小亜羅がそんなことをいう。
もちろんと、ナノカはすぐにうなずいた。
「空の、お城だよね」
「ちがうわ。花ノ宮高校の上空――だったのよ」
「まさかっ！」
万太が声をあげた。その鬼気迫る様子に、ナノカは思わず万太を見る。歪んだメガネを押さえて、万太は小亜羅を睨みつけるように見ていた。
「やはり、移動させることが……！」

「そう、さすがね、生徒会長」
小亜羅は余裕の笑顔を浮かべた。
移動といわれて、ナノカもはっとする。
「花ノ宮高校は、じつは花ノ宮町の端っこにあるの。ほんの少し移動するだけで、もう花ノ宮町から外れることになる。もうすぐ、花ノ宮町を出るわ。意味、わかるでしょう？　花ノ宮町限定ヒーロー、ナノカちゃん？」
ナノカは理解した。
それは、城へ来てすぐに、万太からいわれたことだった。
最終的には、そういう戦略で来るだろうと。だから、驚かなかった。
「わかった」
すぐに、覚悟を決めた。
決めていたことだ。
もしナノカが全力を尽くしても、小亜羅が悪将軍のままならば――失った心を取り戻すことが、不可能なようならば。
「あたしね、こあらちゃん。いろんなこと考えたの。この町に戻ってこられるって決まったときから」
ナノカは、全身の力を抜いた。もう、気を張っている必要はなかった。
「うふふ、なあに？　感動的な場面よね。ちゃんと聞いてあげるわ。なにを考えていたの？」
小亜羅が優しく、促してくれる。
「どんな学校かなとか、どんな制服かなとか……こあらちゃんと同じクラスになれるかな、どんなふうに一緒にいられるかな――絶対楽しいに決まってる、とか、いろいろ」
ナノカは自分の両手を見た。それからヒロシを見て、万太を見て、最後にもう一度、小亜羅を見た。
「自分がヒーローになれるってことも忘れてたし、こんな城が出てくるとも思わなかったし……こうやって一生懸命戦うことになるな

んて、もちろん、思わなかったよ。最初は、なんでこんなことになっちゃったんだろうって思ったけど――でも、楽しかった。たぶんなにもない普通の高校生活より、楽しかったよ」
「あら」
小亜羅が笑う。いつものように小首をかしげるようにして、上品に。
「ナノカちゃんったら、まるでお別れの言葉みたいだわ。それではさようなら、と続くのかしら」
「うん、そう」
ナノカはいった。
最終手段だ。そのつもりだった。
「ありがとう、こあらちゃん」
嘘のない満面の笑みで、心からの言葉を告げる。
「大好き」
「……？」
小亜羅に背を向けて、ナノカは走り出した。城は動いているのだという。もうすぐ、花ノ宮町を出るのだと。
まだ間に合うだろうか。考えている余裕はない。
拳に力を込めて、構えながら走る。速度を上げていく。石の壁に向かって、拳を引く。最初にこの部屋に来たときのように――今度は、城の外に向かって。
「ナノカちゃん！」
なにをするつもりかわかったのだろう。小亜羅が叫ぶ。
しかしもちろん、止まるつもりはなかった。
ナノカは壁を殴りつけた。拳が壁を突き破る。そのまま崩れ始める瓦礫に、身を投じる。
簡単なことだ。
ヒーローがいたから、悪将軍が生まれた。
それなら、ヒーローがいなくなればいい。
ナノカは、空にダイブした。

scene_14 「良かった」

静まりかえっていた。
だれも声を発しない。
羽島万太は、小亜羅を見た。呆然として、ただ立ち尽くしている。
メガネを押さえた。
自分にも、すべきことがある。役割を、まっとうしなければならない。
「確認、しないのですか」
静かに問うと、小亜羅はひどくゆっくりと、首をこちらに向けた。大きく見開かれた瞳は、まばたきを忘れてしまったかのようだった。表情は動きを止めている。
「……確認？」
その口が、やっと声を発する。
万太は静かにうなずいた。
「確認です。これがあなたの望みでしょう。あの勢いならば、花ノ宮町から出たはずです。そうなればナノカさんは、ただの女子高生だ。この高さからでは……」
「やめて！」
小亜羅が叫んだ。憎しみのこもった目で、万太を睨みつけてくる。
どうして睨まれなければならないのか、まったくわからない。万太は彼女がいつもそうするように首をかしげる。
「なにか？　あなたの目的が達成されて、喜ぶところでしょう」
「ちがうわ。こんなことが目的じゃなかった。最後にはナノカちゃんが勝てば良かったの。ナノカちゃんはあきらめないもの。絶対あきらめないって、知ってるもの……！」
「あきらめなかったんですよ」
本当にわからないのだろうか。苛立ちながら、万太はそれでも丁寧に、いってやることにする。

「ナノカさんはあきらめなかったんです、あなたを」
だから、自分よりも小亜羅を優先させたのだ。
それだけのことだった。
わからないはずがないのだ。目を逸らしているのだろう。それでは、なにも変わらないのに。
「……認めないわ」
性懲りもなく、小亜羅はそういった。風をまとって、浮き上がる。
万太が駆け寄り、彼女の腕をつかむ。小亜羅はちらりと万太を見たが、止めなかった。万太もろとも宙を移動し、ナノカが空けた穴から、外へ出る。
万太は景色を観察した。高校は後方に見える。城がある位置自体は、まだ花ノ宮町の上空のようだった。
前方に川。消して広くはない、小さな川だ。その川までが、花ノ宮町だった。
「川より向こうなら、隣町です。ナノカさんがどこにいるのか、見えますか」
いわなくても知っていただろうが、そういって小亜羅の様子をうかがう。
小亜羅は答えない。
しかしすぐに、息を飲むような悲鳴が、彼女の口から漏れた。
急降下していく。
万太にも見えた。
川の向こう側、河川敷公園に、横たわる少女。
「ナノカちゃん」
着地し、小亜羅が駆け寄っていく。
遠目にも、わかった。
ナノカの下に、赤い池。
血だまりのなかに、倒れているのだ。
万太は自らの胸を握りしめた。本当は、すぐにでも駆け寄りたかったが、懸命に耐える。

見届けなければならない。
悪将軍の、結末を。
「ナノカちゃん……？」
小亜羅が、呼びかける。返事をすると思っているのか、ただすがっているだけなのかはわからない。
万太は意識的にゆっくりと、ナノカに歩み寄った。うずくまり、口元に耳を寄せる。指先を首筋にあてた。鼓動を感じ取ろうと、そのまましばらく、待つ。
そうして、首を左右に振った。
「嘘」
小亜羅が、膝をつく。
「嘘だわ。ヒーローだもの。そんな簡単に、死んだりしないわ。だってまだ、これから……」
「簡単だと思うんですか！」
万太は思わず、吠えていた。
簡単などという言葉は、口にして欲しくなかった。ナノカだけではない、いったいどれだけの人間を巻き込んだのか、わかっていないのだろうか。
学校関係者全員を不安に陥れ、大半を城へ拉致したのだ。本人たちだけではない、その家族たちや、関わった人々すべてが、どんな思いをしたことだろう。
まちがっても、『簡単』ではないはずだった。
「わかってるわ……」
小亜羅の声が、かすれる。
堪えきれなくなったように、目を閉じた。涙があふれ出ていく。
「ごめん……ごめんなさい、ナノカちゃん……ごめんね、ごめん、本当にごめんなさい」
涙は止まらなかった。もう聞こえていないことはわかっていただろうが、それでも何度でも謝り続けた。
「こんなつもりじゃなかったの……こんなふうにしたかったんじゃ、

なかったの」
動かなくなってしまったナノカに、顔をうずめる。そのまま、子どものように、泣きじゃくる。
「うあぁぁん！」
しゃくり上げ、声をあげ続けた。何度も何度も、まるで泣くことで罪を洗い流すかのように。
万太は、深く、息を吐き出した。
今の彼女の気持ちなら、手に取るようにわかった。
『後悔』。
成功だ。
「……えへへ」
ナノカが、笑みをこぼす。
弾かれたように顔を離し、小亜羅がナノカを見た。
呼吸も脈拍も確認していたが、万太も胸を撫で下ろす。あらかじめ、計画していたことだった。もちろん、発案したのも、城にある食材を使って血糊を作り、持たせておいたのも万太だ。
「生きてる……じゃない」
単純な計画だ。
小亜羅が悪将軍になるのと引き替えに失っている心が『後悔』だということは、Ｊ・Ｊの言葉からわかっていた。あとはそれをどうやって取り戻させるか。
まずは、無抵抗で攻撃を受ける。
それでもだめならば反撃し、追い詰められた小亜羅が城を動かすのを待つ。
城が町から出るところで、自ら落下する――もちろん、花ノ宮町へ。着地してすぐに町の外へ出て、あとは血糊をぶちまけてその上に倒れ、死んだふりをする。
とはいえ、実践するのは困難だった。
すぐに追ってこられれば、それだけで台無しだ。ヒーローだからといって、城から落ちても平気だという確証もなかった。一番苦労

したのは、どこからどこまでが花ノ宮町なのかを正確にナノカに覚えてもらうことだったかもしれない。彼女はとにかく、物覚えが悪いのだ。

万太は、空を見上げた。

城の輪郭が、消えようとしていることがわかった。悪将軍としての力がなくなったのだから、当然だ。なかの生徒たちはどうなるのだろうと不安に駆られるが、消えゆく城の光に包まれるようにして、ゆっくりと降りていくのが見えた。まだ気を失っているのか、人影が動く様子はない。ひとりだけ、フリルエプロンの人物がなにかを叫んでいるようだったが、さすがに聞こえてはこない。

「だましたのね……」

小亜羅の声が、震える。

「うん、ごめんね」

ナノカの声にも、覇気がない。町を出てしまったことで、町のなかでは平気だったダメージが襲いかかっているのだろう。それも予想していたことだったが、我慢してもらうほかはない。

小亜羅は、ナノカに抱きついた。

止まっていた涙は、もう一度溢れ出していた。

「良かった――！」

万太はメガネを外して、空をあおぐ。

これで、終わったのだ。

とりあえずは……――

――たぶん。

＊＊＊

悪将軍事件から、一ヶ月。
花ノ宮町には、以前と同じような平穏が訪れ――
ては、いなかった。
「とりゃ――――！」
叫び声とともに、ナノカがトラックを持ち上げる。
あわや下敷きになりそうだった少年は、「ありがとう、美少女ヒーローナノカ！」と礼を叫んで走り去っていった。ナノカは何事もなかったようにトラックを道路上に戻し、額の汗を拭う。
「危なかったねー！」
ごく軽くいった。万太は痛む頭を押さえる。
「もう少し交通量が多かったら、よけい大事件になるところでしたよ！　考えてから行動してくださいと、いつもいっているではないですか」
「ええ、考えたよ、考えた」
ナノカの返事はあまりにも簡単で、本当に考えたのかどうかはなはだ怪しい。おそらくは考えていないだろうことがうかがえる。
小亜羅が悪将軍ではなくなったとはいえ、依然として、ナノカはヒーローのままだった。
ヒーローとしての心も取り戻したナノカがおとなしく日常を過ごすはずがなく、ご町内ヒーローとして大活躍の日々だ。万太は生徒会長として、引き続きナノカの監視およびアドバイスを欠かさない。
「なれなれしいわ、イヌ！」
そこへ、リムジンに乗った小亜羅が颯爽と現れる。今日はもともと、ナノカと小亜羅のデートの予定だったのだ。二人でショッピングということらしい。
万太が居合わせたのは、まったくの偶然だった。昨日学校でデー

トの話を聞いたから、それとなく待ち合わせ場所周辺でうろうろしていた――というわけではない。決してない。
電柱のうしろでビデオカメラを構えている変態がちらちらと視界に入るが、まちがってもあれと同じではない。万太は心のなかで断言する。
「こあらちゃん！　あのね一、偶然万太くんに会ったんだよ。せっかくだから、一緒に行こうか」
「いやよ、どうしてこのイヌと」
小亜羅は前にも増して辛辣だ。完全に敵認定されている。
しかし万太は、くじけなかった。
「せっかくなので、ご一緒してもいいですか」
ぐいぐい押していく。あからさまにいやそうな顔をして、小亜羅が腕を組む。
「どうして？　二人でデートなの。割り込まないでいただきたいわ。あなたがわたしよりもたくさんナノカちゃんを愛しているというのなら、考えないでもないけれど？」
本当だろうか。むしろ余計に邪魔者扱いされるのではないだろうか。
小亜羅のこのいいかたには、もう慣れていた。そういえば萎縮して、なにもいい返せないと思っているのだろう。実際、いままではそうだったのだ。
しかし、今日の万太は、ひと味ちがった。
意を決していた。
この一ヶ月、ずっと、いおうとしていることだった。今日こそはと、腹に力を込める。
ナノカがヒーローとしての力をもう一度欲したときに、決めたことだった。あのときには止めることができなかったが、その代わりに、自分にできることがあるはずだった。
否、やらなければならない。
ぜひ、したい。

それこそが、万太の使命だと感じていた。
「ナノカさん」
小亜羅の身体を丁重に押して、どいていただく。ナノカを正面から、見る。
「なになに？」
ナノカは純真そのものだ。万太は息を飲んだ。勝負所だ。決してどもらないようにと、自らにいいきかせる。
「あ、あなたの恋心は、必ず僕が取り戻して、みみみせま……」
「ナノカちゃん、大変！　虹色の猫が空を飛んでいるわ！」
「え、どこどこ！」
小亜羅の声に、ナノカはあっさり首をまわす。
空飛ぶ虹色の猫。
そんなわけのわからないものにすら、勝てない自分。
万太はうなだれた。
「……ナノカちゃんをどうこうしたかったら、わたしとお兄さまの屍を越えて行きなさい」
ドスのきいた声で、小亜羅が囁いてくる。
万太は想像した。
小亜羅とヒロシがタッグを組んで敵にまわったら、まず勝てる気がしない。
「それだけじゃないわよ。あれからＪ・Ｊの再捕獲のため、三ッ山家が総力をあげてこの町中を捜索したのだけれど……」
「Ｊ・Ｊ？」
万太は思わず反応する。Ｊ・Ｊのことは、気になっていたのだ。商売だといいつつも、結局のところナノカに協力してくれたＪ・Ｊに、一度は礼をいいたいと思っていた。
Ｊ・Ｊが封印されていた家というのは、三ッ山家のことだったらしい。十二年前、ナノカに喜んでもらいたいという一心で、小亜羅が封印を解いたのだという。Ｊ・Ｊにそれとなくほのめかされたときに、そういうことなのだろうと万太は予想していたが。

「J・Jが、どうかしたんですか」
問うと、小亜羅はにやりと笑った。かつての悪将軍らしい、意地の悪い笑みだ。
「逃げられたそうよ。野中ナノカという人間に興味があるから、彼女の人生が終わるまでは捕まるわけにはいかない、って」
「――――！」
万太は息を飲んだ。なんという意外なライバル。
いもしない虹色の猫を必死に探すあの馬鹿そうな――実際にそこそこ馬鹿な――少女の、いったいどこがいいのだろう。
と、自分にも問うてみる。そして頬を染める。
「ねえ、こあらちゃん！　いない、いないよ！」
「あら、変だわ。たしかにいたのに……」
白々しく、小亜羅が首をかしげる。しかしそれを疑わないのが、ナノカだ。
「あたし、ちょっと探してくる！」
ナノカは左手を引き、右手を突き上げた。
「とう！」
叫んで地面を蹴りつける。
飛んだ。
この一ヶ月で、ナノカはとうとう、空まで飛べるようになっていた。
「デート、あとでねー！」
叫び声が、だんだん遠くなっていく。
いったい彼女は、どこまでいってしまうのだろう。
「平和って、いいわねえ」
その様子を微笑みながら見守って、いったいどの口がいうのか、平然と小亜羅がいう。
万太はメガネを押さえた。
……これは、平和か？
思わないでもないが。

「そうですね」
あたたかい日差しに目を細め、そう答えた。

了

ｓｃｅｎｅ＿１４　「良かった」（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

感想やポイント、読者登録、すべて大変な励みになりました。本当にありがとうございました。

感想等ございましたら、お気軽に声をかけてくださると大変嬉しいです。

ＨＰの拍手からでもなんでも結構です（喉から手。

少しでも良いものが書けるよう、今後も精進いたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9908x/

花ノ宮町限定☆美少女ヒーロー

2011年11月29日01時59分発行